九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[33] Crossover

https://doi.org/10.15017/26152

出版情報：Crossover. 33, pp.1-35, 2013-03. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

CROSSOVER

No.33 March, 2013

九州大学大学院
比較社会文化学府

Contents

巻頭言

公開シンポジウム「大震災から２年：復興の現状と防災に向けた課題」 …… 服部　英雄 …… 1

新任教員自己紹介

私の研究分野、生物人類学 …… 瀬口　典子 …… 2

受賞報告

毎日出版文化賞　受賞のことば …… 服部　英雄 …… 4

《突出貢献賞》を受賞して …… 東　英寿 …… 5

受賞のことば …… 山尾　大 …… 7

ロシア・東欧学会研究奨励賞を受賞して …… 西山　美久 …… 9

自著を語る

『政治的アイデンティティの人類学―21世紀の権力変容と民主化にむけて』(2012年、昭和堂) …… 太田　好信 …… 11

海外レポート

ソウルでの１年間 …… 波潟　剛 …… 12

九州大学留学から帰国就職二十年の栞―比文叢書『異文化を超えて―アジアにおける日本再考』出版に寄せて― …… 徐　興慶 …… 14

学内レポート

比較社会文化学府主催FD・SD研修(共催：比文同窓会／協力：九州大学キャリア支援センター) …… 松永　典子 …… 16

今津干潟周辺のレンコン畑と鳥害被害についての調査を行って …… 王　廷卓 …… 18

社会人院生コーナー

思えば遠くに来たもんДa(ダ)？ …… 東出　朋 …… 21

ゆっくりゆっくり、めぐりめぐって …… 相原　幹子 …… 23

博士論文を書き終えて

博士論文を書き終えて …… 本多　美保 …… 24

新しい出発

蒼雲を笠にかぶりて …… 土井　徹平 …… 26

大学院データブック …… 29

編集後記 …… 35

表紙の説明

比較社会文化学府の研究・教育のキーワードは、「異なる社会と異なる文化」、「グローバリゼーション」、「地球環境」です。表紙のデザインは、諸問題が地球規模で進行する現代社会を学際的なアプローチで研究している本学府の姿勢を象徴しています。「異なる社会と異なる文化」を繋ぐ言葉をロゼッタストーンで、「グローバリゼーション」を大陸間を渡るカモで、「地球環境」をジグソーパズルの衛星画像で表しています。

表紙デザイン：独立行政法人 国立科学博物館・非常勤研究員　林 辰弥

公開シンポジウム「大震災から２年：復興の現状と防災に向けた課題」

服　部　英　雄
（比較社会文化学府長）

３月３日震災プロジェクトによる市民公開シンポジウム（主催：比較社会文化研究院）がアクロス７階大会議室にて開催された。熱心な講演、白熱した討論があって、期待どおりの内容だった。報告者はマスコミやネットに頻繁に登場する有力な発信者であった。準備くださった関係の方々に感謝する。

「津波被災地における復興について」柳井 雅也（東北学院大学）

「遠隔地避難者から見た原発震災被害と今後の課題－ひとりひとりの復興と再生を求めて」宇野朗子（原発事故子ども・被災者支援法 福岡フォーラム）

「２年目を迎える福島第一原発事故被災地の現状」木村真三（獨協医科大学）

「巨大津波からの警告を読み解く－東日本大震災をどのように学び、西日本大震災に備えるか－」岡村眞（高知大学）

報告者の一人、宇野 朗子（さえこ）さんは震災で福島県から福岡県福津市に避難してきた。もともとプルサーマル導入に強い疑問を持っていて、福島原発にも足を運んでいた。報告では３月11日その当日のメールが写され、炉心溶融・メルトダウンの危機を友人たちに一斉発信して警告したと発言された。質問があって詳細にわかったのだが、彼女は震災の前年６月13日、震度５の地震に遭遇、それはプルサーマル導入中止要請のため、福島原発正門ゲート前にいたときだった。その４日後、外部電源の喪失事故が起きて、水位が２メートルも下がった。3.11を予告・予言する事件だった。しかしマスコミはこの事故の重大性に気づかず、東電はマニュアルを手直しした程度で、再稼働した。だからいつかこの日が来ることはわかっていて、3.11の当日も激しい揺れの中で、とうとうまにあわなかった、と考えられたそうである。（http://www.windfarm.co.jp/blog/blog_kaze/post-11463）

知っている人はみな知っていたが、電力会社、政治家、そしてマスコミも無視していたのである。知っていてもどうしようもないような政治構造・社会構造になっていたのだろうか。わかっているはずの内部の人も、自分が生きている間にその日がこなければいいとだけ願っていた。大半の国民には危機意識さえも伝わらなかった。

雑誌「科学」に、石橋克彦「原発震災－破滅を避けるために－」が掲載されたのは1997年、東日本震災の14年も前だった。毎日新聞記事に要旨がまとまられていた。

《最大の水位上昇がおこっても敷地の地盤高（海抜６ｍ以上）を越えることはないというが、1605年東海・南海巨大津波地震のような断層運動が併発すれば、それを越える大津波もありうる》

《外部電源が止まり、ディーゼル発電機が動かず、バッテリーも機能しないというような事態がおこりかねない》

《炉心溶融が生ずる恐れは強い。そうなると、さらに水蒸気爆発や水素爆発がおこって格納容器や原子炉建屋が破壊される》

《４基すべてが同時に事故をおこすこともありうるし（中略）、爆発事故が使用済み燃料貯蔵プールに波及すれば、ジルコニウム火災などを通じて放出放射能がいっそう莫大（ばくだい）になるという推測もある》

14年も前に、ここまで予測できていて、ほぼ予言どおりの事態になってしまった。シンポジウムではチェルノブイリのようすや東南海巨大地震の起こる原理・時期（周期）についてわかりやすい解説があった。すぐそこに、第２の惨事がみえている。世界・地球の人々を幸福にできる強い学問を、いかに構築するのか。きくもの、ひとり一人に深く、重い問いかけがあった。

○○○ 新任教員自己紹介

私の研究分野、生物人類学

瀬　口　典　子
（環境変動部門　基層構造講座）

私は、平成24年７月１日、本研究院に着任いたしました。これまで、カリフォルニア大学ロスアンジェルス校で学部教育、ミシガン大学アンアーバー校で大学院教育を受け、その後、モンタナ州、モンタナ大学ミズーラ校人類学部で准教授として教鞭を執ってきました。日本に帰ってきたのは30数年ぶりです。私の研究分野は生物人類学です。日本では自然人類学という名称のほうに親しみがあるかもしれません。私がアメリカに留学したのも、当時日本には自然・生物人類学を勉強できる大学がほとんどなかったからです。現在でも日本では自然・生物人類学を学べる大学は大変少ないです。九大は自然人類学が学べる数少ない大学のひとつです。日本の大学・大学院教育を受けていない私は、アメリカの大学システムとは全く違う日本の大学で戸惑うこともまだまだ多いのですが、この場をお借りして、自然・生物人類学と、この学問が直面している問題について紹介させていただきたく思います。

自然・生物人類学とは、簡単に言うと、人類の多様性・進化・適応、進化のメカニズム、人類の起源、人類の移動・拡散の歴史などを研究する学問です。人類の「多様性」に関しては生物学的な適応だけでなく、文化的な適応を探求することも重要です。しかし、20世紀初頭まで、自然人類学は、主に『種』の概念、および『人種』という概念を主に研究してきました。また、そうした人類学研究は、植民地主義、帝国主義、人種主義に負の影響を与えてきました。日本の自然人類学研究も例外ではなく、日本人の起源に関する研究が日本の帝国主義、植民地主義を支えるために利用されてきた過去があります。

アメリカでは、1951年にウオッシュバーンによって、『新しい自然人類学』が提唱されました。進化論と集団遺伝学を統合し、適応と進化を研究し、適応と進化のメカニズムを遺伝子レベルで探求する、というものです。ウオッシュバーンによる「新しい自然人類学」が提唱された後、形質、骨格生物学を中心に研究してきた自然人類学者たちは生物文化的（biocultural）な枠組みで新しいアプローチを開始しました。それ以来、アメリカではPhysical Anthropology 自然人類学よりもBiological Anthropology 生物人類学という呼び方が一般的になりました。

このような動向のもと、機能形態学・生物文化的アプローチをとる古人類学・進化研究、生物考古学、また、適応・成長・発達・生態、栄養人類学なども含むHuman Biology分野の研究が盛んになりました。生物文化的なアプローチをとる生物考古学では、集団の形態・遺伝的距離から歴史を探る研究；過去の食生活を探るための骨化学・歯科人類学；また、骨格生物学によるデータを用いた埋葬状況の研究、古人口統計学と古病理学による文化活動の変化を探る研究；進化的視点で、人類集団の適応を探る研究、以上が主な研究テーマとなっています。

前述のように、20世紀以前のアメリカ自然人類学は「生物学的な人種」を構築してきた歴史をもっています。1950年以降、人類学者たちは「人類の多様性は人類が環境に適応し選択された結果として、また、遺伝的浮動や遺伝子流入によって生まれてきたもので、その多様性は連続的で、カテゴリーに別けられるものではない」と「人種概念」の虚構性、生物学的な『人種概念』の無効性を精力的に訴え続けていますが、アメリカ社会では未だに人種概念がリアルに存在し、人類学者たちの啓蒙活動の成果はまだまだ浸透していないのが実状です。日本でも、自然人類学者は人種概念を使うことに対して無頓着で、NHKの科学番組でも未だに『人種概念』が使われているのが現状です。

1980年代からは、フェミニスト生物人類学者たちが、文化生物学のフレームワークから、ジェンダーバイアスといった文化的に構築された価値観が人間の行動に与える影響についてに着目し、遺伝学、形質人類学、司法人類学、古人類学の見直しをはじめました。フェミニスト理論の視点からも、将来の新しい研究方向を切り開こうとしています。

さて、私がアメリカに住んでいた30数年の間に、アメリカ人類学にもっとも大きなインパクトを与えた出来事の一つは、1990年にThe Native American Graves Protection and Repatriation Act（NAGPRAアメリカ先住民墳墓保護返還法）が制定されたことでしょう。私は、博

士論文を終える直前から、私の指導教授であるC.L.ブレース教授と一緒に、アメリカ先住民の拡散の歴史研究をやってきました。ブレース教授は40年にわたり、世界中のヒトの歯と頭蓋骨計測データを収集されてきました。彼はデータ収集のために何度か日本を訪れており、当時九大医学部教授であった永井昌文先生と、歯のサイズの研究から、北部九州、山口の弥生時代人は古墳時代・現代日本人にかけて遺伝的に連続して続いているが、縄文時代人の遺伝子を強く残しているのはアイヌ民族であるという論文を出版しています。そして、その時に日本で見た縄文時代人の顔がミシガン州の古アメリカ人の顔に似ていることに気がついたそうです。そして、ブレース先生と私は、日本列島の縄文時代人の共通祖先がアメリカ大陸に拡散してきたという仮説を立て、NAGPRAが始まる前から精力的にデータを集め、縄文人と古アメリカ人との関係、人類の新大陸への拡散の歴史を解明する研究をしてきました。近年、新しいテクノロジーが開発され、分析方法もより洗練されてきましたが、アメリカではNAGPRAにより先住民の遺骨はつぎつぎと返還され、新しい技術を応用して研究する機会は残念ながら失われつつあります。

この問題はアメリカだけの話ではありません。日本でも過去に倫理的に問題のある遺骨収集が行われてきました。現在、先住民族アイヌの遺骨返還が求められており、人類学者は返還要求に対して、またアイヌ民族に対しても、真摯な対応を迫られています。もし返還だけでなく、研究が許されるのならば、アイヌ民族により貢献できる研究を考えていかなければならない重要な時を迎えています。例えば、生物文化的・進化的アプローチで人骨を科学的に研究することによって、疾病と環境との関係、過去の健康状態を探ることから過去の社会的な不平等、民衆の生活の歴史を明らかすることはアイヌ民族の苦難の歴史を立証するためにも重要ではないかと思われます。また逆に、アイヌ民族の食生活は和人の食生活とは違ったために健康状態がよかった可能性もあるかもしれません。人骨資料がむやみに返還されてしまうと、人類学研究がその民族だけでなく、人類全体に貢献をする機会を失ってしまう可能性があります。アメリカ自然人類学会の失敗を繰り返さないためにも日本の人類学は日本先住民族・少数民族と対話を続けて、遺骨に関わる様々な問題を解決していかなければならないでしょう。

現在アメリカ自然人類学会では、人類学研究の過去を反省、再評価し、そこから21世紀の新しい生物人類学の研究テーマと「公共人類学」を意識した、社会に貢献するための新しい活動を模索することが提唱されています。1965年に、ミシガン大学の文化人類学者レスリー・ホワイトは、人類学は現代の社会に最も関連のある研究をすべきであると述べました。このままでは生物人類学には未来がないという危機感を持っている生物人類学者は多く、ホワイトのこの言葉を実践しなければならないという意見が多くでています。日本の自然人類学でも同様の方向性を探ることが必要かもしれません。

そのためにも、生物人類学、人類学的考古学、文化人類学、言語人類学を融合した形のアプローチ、他の分野との融合研究が必要となるでしょう。例えば、現代社会に貢献できる研究をするために、生物人類学においても、世界的規模でますます増加する新しい病気と人類の進化の関係、また、その要因を理解する研究は重要です。栄養問題も第三世界や発展途上国における現実的な問題で、それを進化的な生物考古学の視点で調査していくことは重要です。また、グローバルな不平等・格差の問題も、過去から現代社会につづく切実な問題で、社会的、政治的、経済的な格差も、適応と進化の視点からの研究がもっと深められる必要があるでしょう。こうした貢献が現代社会に還元されなければ、生物人類学は学問の意味をなくしてしまうでしょう。新しい生物人類学が現実的に社会貢献できるかどうかは、これからの私たち自然・生物人類学者たちの努力にかかっています。社会に貢献、還元しようとする、公共人類学（public anthropology）を意識した将来の活動と研究目標が、この学問分野の研究活性化のためにも必要で、そのためにも、私はこれからもこの学問の意味を問う模索を続けていかなければなりません。

○○○ 受賞報告

毎日出版文化賞　受賞のことば

服　部　英　雄
（比較社会文化学府長　社会情報部門　地域資料情報講座）

昨春『河原ノ者・非人・秀吉』（山川出版社）を上梓した。700頁をこえる、ぶ厚い専門書であったから、読んでくださるのは一部の研究者かと思っていたが、思いのほか反響があって、版を重ねることができた。新聞書評でも好意的に扱っていただけた。さらに第66回毎日出版文化賞（人文・社会部門）を受賞できた。11月３日文化の日に公表され、11月28日芝の東京プリンスホテルで授賞式があった。伝統のある学術賞であり、光栄なことだった。文学・芸術部門＝赤坂真理「東京プリズン」、自然科学部門＝三橋淳「昆虫食文化事典」、企画部門＝見田宗介「定本　見田宗介著作集」、特別賞＝加賀乙彦「雲の都」、と同時受賞者には斯学の大家がおられ、雲の上の人という感じだった。

図書名のうち、「河原ノ者・非人」は身分呼称・賤称であり、差別された人々をさす。かつては差別の歴史については、ふれない傾向が見られた。むしろ隠すようにされていた。ただ差別は次第に希薄になったかのように見えて、結婚問題などで、とつぜん牙をむくことがある。歴史に即して科学的に解明することで、差別の真の解消に貢献したい。そういう気持ちがあったから、史料に書かれたとおりに扱った。秀吉を書名に含めた。秀吉は個人の名前であって、賤称ではないから次元が異なるものを並べているが、結果的にはこれでよかったと考えている。家族の庇護を離れた秀吉（藤吉郎・日吉丸）は、乞食・物乞いの集団である非人組織に入らなければ、生きてはいけなかった。そこで猿のまねをしたり、針を売ったりしていた。その経験・人心掌握術や表面下にある知識技術の活用が天下取りに役立っている。こうした観点を取り入れて歴史を解釈し直す。非人や河原ノ者組織がはたす社会的な役割を見なければ、当時の本当の姿はわからない。油売りだった美濃国の斎藤道三（織田信長の舅）も似た境遇にあったし、托鉢・勧進をしていた明の朱元璋（洪武帝）も出自は賤に近かった。豊臣秀頼は秀吉の実の子ではないとした部分は、論旨の流れから外れたかも知れないが、センセーショナルに取りあげられることが多かった。読者もここに関心を持たれる方が多く、それはありがたかったけれど、ぎゃくに前半の方、河原ノ者と犬追物を扱った論考やサンカの考察に興味をもったという方も少なからずおられた。

わたしはいま「被差別民衆史・研究方法論」というテーマで科学研究費をいただいている。現在３年目の終わりで各地の研究者と連携し、フィールド調査も行っている。例えば福岡の市内を歩いても、奈良の町を歩いても、それまで全く気づかなかった目線で、ひとびとの歴史を見直すことができる。視点をかえればこんなにも多くが見えてくる。課題はあまりに多い。今後も史実の掘り起こしを進めたいと思っている。

なお11月30日に国際政治学会奨励賞を受賞された山尾大さんといっしょに祝賀会を開いていただき、毎日賞受賞の先輩である高橋憲一さん（第60回、『ガリレオの迷宮』、自然科学部門）も参加くださった。みなさん、ありがとうございました。

（2012年11月30日　祝賀会にて）

《突出貢献賞》を受賞して

東　　英　寿
（文化空間部門　文化表象講座）

2012年８月25日、中国歐陽脩研究会より「突出貢献賞」を頂いた。「突出貢献」は中国的表現で、日本語の表現では「特別貢献」となるであろう。中国江西省吉安で開催された「2012歐陽脩国際学術研討会」でこの賞を授与された。受賞の大きな理由は、これまで全く知られていなかった歐陽脩（1007～1072）の書簡96篇を発見し公表したことにある。

（歐陽脩研究会からの賞状）

歐陽脩は、中国宋代の政治家・官僚・文人で、中国の中学や高校の教科書で必ず取り上げられる偉人である。千年以上前に生まれた人物の、未発見の書簡が存在しているとは、にわかに信じられないであろう。私も発見した当初は何かの間違いだと思ったが、その後研究を進めて2011年10月に開催された日本中国学会で、そのことについて研究発表をした。これは、朝日新聞、讀賣新聞、毎日新聞、日本経済新聞、西日本新聞、南日本新聞、山口新聞、熊本日日新聞等の日本のマスコミで報道されただけでなく、中国国営通信社・新華社に「九州大学大学院比較社会文化研究院の東　英寿教授（中国文学）は３日、中国文人、歐陽脩の書簡96編を発見したと発表した」という書き出しで記事が報道され、それを受けて長江日報、遼寧日報、広州日報、香港文匯報などの多くの中国の新聞に記事が掲載された。人民日報の東京支局長が取材に来て、人民日報に記事が掲載され、更には光明日報の記者も伊都キャンパスまで取材に来て、その内容が光明日報に掲載されるなど、中国で大きな反響を呼んだ。中国の歐陽脩研究者からも、多くの問い合わせが届いた。千年以上前の偉人の未発見書簡が存在していたこと自体、大きな驚きであり、それを日本人が見つけたことで、中国では大きな話題になったと思われる。

2012年１月に中国天津市にある南開大学から招待講演の話が来て、３月５日に南開大学文学院で「新見歐陽脩書簡九十六篇散佚経緯考」と題して講演を行った。

（南開大学文学院での講演）

同じく３月に拙論「新見九十六篇歐陽脩散佚書簡輯存稿」を『中華文史論叢』2012年第１期（上海古籍出版社）に発表した。これによって初めて96編が公開されたことになり、それを受けて『武漢大学学報』2012年第３期では、「新見歐陽脩書簡研究専題」という特集が組まれた。その序文で「2011年は歐陽脩研究領域に重大な出来事があった。すなわち日本九州大学東　英寿教授がその年の日本宋代文学研究会（筆者注：日本中国学会の誤り）で公表したことがそれで、彼は天理本《歐陽文忠公集》中に、その他の版本にはない歐公の書簡96通を発見した。このことが公表されるとすぐに中国や日本の学術界に衝撃を与えた。96通の書簡の全文が《中華文史論叢》で刊行されたことによって、必ずや更に多くの中日学者、とりわけ中国の歐陽脩研究の学者に注目され、歐陽脩研究の更なる発展を推し進めるであろう」と記載され、「東英寿教授新見歐陽脩散佚書簡解読」、「略論歐陽脩書簡的芸術特色－従日本学者新発見的96通書簡説起」等、96編の発見に関する中国の４名の学者の論文が発表された。更に、台湾の国立東華大学から、

○○○ 受賞報告

96篇に関連する論文についての掲載依頼があり、６月刊行の『東華漢学』第15期に「中国大陸方面では、新たに見つけられた歐陽脩の書簡は既に学術界で重視され、……本刊は特に東先生の同意をとり、〈新発見の歐陽脩書簡について〉の中国語訳を転載して、この新発見とその研究に関連する動きを台湾の学術界に紹介したい」として、拙文「新見歐陽脩書簡考」が掲載された。更に、中国を知るための日本語総合月刊誌『人民中国』2012年８月号で「歐陽脩書簡なぜ日本で発見？」と題して、記事が掲載されるなどした。

（『人民中国』2012年８月号、58～59頁）

そして、冒頭に記述した2012年８月25、26日に歐陽脩の故郷である吉安で開催された2012歐陽脩国際学術研討会に招待されて「歐陽脩書簡九十六篇散佚之発現」と題して研究発表を行ったのである。歐陽脩研究会は、中国において歐陽脩や宋代文学を研究する学者で構成されており、歐陽脩研究の中心組織である。2007年の歐陽脩生誕1000年を記念して、歐陽脩研究会が主催した「紀年歐陽脩誕辰1000周年国際学術研討会」に私は招待されて参加し、更に2009年に上海でおこなわれた「上海歐陽脩国際学術研討会」にも招待された。今回、本場の中国の学会から「突出貢献」として表彰されたのは、非常に光栄であり嬉しかった。

（江西省吉安・歐陽脩紀念館）

学会が行われた江西省吉安は、歐陽脩の故郷であり、学会終了後に歐陽脩紀念館を訪問した。紀念館の展示室に2005年に刊行した拙著『復古與創新－歐陽脩散文與古文復興－』（上海古籍出版社）が展示されているのを見つけた時には感動した。

（右から２冊目、拙著『復古與創新－歐陽脩散文與古文復興』）

また、紀念館の館長、歐陽脩35世孫の歐陽勇氏にお会いして、一緒に写真を撮ることが出来たのも収穫であった。

（左、歐陽脩35世孫・歐陽勇氏、右、著者）

2013年２月、九州大学の助成を受けて拙著『歐陽脩新発見書簡96篇－歐陽脩全集の研究－』（研文出版）を刊行した。拙著の中で96篇の書簡を掲載したが、これが日本で初めての公開となるので、今後は日本においても今回発見した96篇の歐陽脩の書簡について、研究が進められていくことを祈ってやまない。

受賞のことば

山　尾　　大
（社会情報部門　欧米社会講座）

学者の端くれをやっていてよかった、と思うことが三つある。

一つ目は、休みが自由にとれること。二つ目は、好きな本を好きなだけ読んでいられること。三つ目は、自由に考え、それを書き残すことが許されること。

このたび、第５回日本国際政治学会奨励賞を賜って、自分なりに一生懸命進めた研究成果が評価されることもまた、研究者冥利に尽きるということが分かった。批判や叱責を受けるばかりだった私も、あきらめずに研究を続けてよかったと思う。

日本国際政治学会奨励賞は、１年に４回刊行される日本国際政治学会の学会誌、『国際政治』への投稿論文のなかから選ばれる。審査対象が40歳未満の若手に限定されるとはいえ、日本ではわりと大きな学会なので、受賞した本人が一番驚いている。出張中のロンドンで受賞の知らせを聞いたときは、たちの悪い冗談かと思ったほどである。

受賞対象となった、「反体制勢力に対する外部アクターの影響――イラク・イスラーム主義政党の戦後政策対立を事例に」（『国際政治』166号所収）は、昨年上梓した『現代イラクのイスラーム主義運動』（有斐閣）で用いたデータを圧縮して、新たな論点から分析を加えたものである。

私はこれまで、2003年のイラク戦争を経て政権党となったイスラーム主義政党が、半世紀におよぶ反体制活動のなかでどのような変容を遂げたのか、その政治史の解明に取り組んできた。地下活動が長かったため、近隣諸国や欧州に散らばった資料を収集することには、大きな困難がともなった。世界各地を回って集めたデータをもとに、受賞論文では、「イスラーム主義政党が反体制期に外部アクターから受けた多様な影響が、戦後の政権運営にいかなるインパクトを与えているか」、という問題を解明した。国際関係論では、これまで内政に与える国際政治の影響は様々な角度から検証されてきたが、当該論文は、内政が国際政治から受けるインパクトに、元亡命勢力がいかに関係し、媒介しているかを分析する試みでもあった。

拙著のあとがきなどで既に何度か書いたことだが、研究を進めるにあたり、私は聞き取り調査や現地で刊行される一次資料の精査に立脚する地域研究の方法論をとってきた。そのなかで、研究対象の実態をより良く理解するために意味ある「問い」を発掘し、そして意義ある答えを導出するにはどうすればいいか、ずっとこのことばかり考えてきた。その過程で、私にとって課題であったのは、内在的に掘り起こした「問い」を、学術的な理論とどのように接合していくのか、という問題であった。こうした方法こそが研究対象の理解を深める、と信じてやってきたが、中東やイラクをめぐる国際政治の理解に少しでも新たな知見を加えることができたとすれば、望外の喜びである。

今一度、冷静に振り返ってみると、今回の受賞論文は学問的に完璧とは程遠いようにも思う――もとより完璧な研究などあるとは思わないが。それでも、投稿論文をまとめたときは、その時点で全力を尽くしたし、少しでも手を抜いたつもりはない。学者の端くれを続けるためには、ひたすら業績を増やすことが求められる状況で、私は常に不安と格闘しながら研究成果を発表し続けてきた。業績を量産しているだけだとご批判をいただいたこともある。だが、今回賞を賜って、研究内容が少しでも評価されたのだと信じることにして、これからも研究成果を発信し続けたいと思う。

とはいえ、不肖の私がいくら努力を重ねたところで、素晴らしい研究環境がなければ、研究成果を発信することも、このような賞をいただくこともできなかった。常日頃よりご指導をいただいている学会の先生方、査読をしていただいた匿名のレフリーの先生方にはお礼を申し上げたい。

なによりも、九州大学比較社会文化研究院の素晴らしい研究環境なくしては、受賞どころか、論文の投稿すらままならなかったに違いない。服部英雄先生をはじめとする執行部の先生方、総合演習で日頃からお世話になっている松井康浩先生と益尾知佐子先生、そして研究院の全ての先生方に、心より感謝申し上げたい。ありがとうございました。

このたび賞をいただいて、学者の端くれをやっていてよかったことが一つ増えた。私の能力からすると、評価され

○○○ 受賞報告

ることは今後そう頻繁にはないだろう。だが、自由に休みをとることはさておき、書物を読んで、自由に考え、そして何より研究成果を発信し続けることだけは、どのような状況にあっても大事にしていきたいと思っている。

2012年10月24日授賞式（名古屋国際会議場）

受賞スピーチ

ロシア・東欧学会研究奨励賞を受賞して

西　山　美　久
（国際社会文化専攻　日本学術振興会特別研究員）

私は比較社会文化学府に入学以来、ソ連崩壊後のロシア政治を勉強してきました。ロシア政治を勉強していると、いろいろな方から「ロシアってどんな国？」と聞かれます。多くの日本人はロシアと聞いて、ドストエフスキーやチェーホフなどのロシア文学、ロシア帝国を支配し栄華を誇ったロマノフ王朝、ボルシチやウォッカ、入れ子式人形マトリョーシカ、そしてレーニンやゴルバチョフ、プーチンといった政治指導者などをイメージするのではないでしょうか。

ですが、ロシアを語る上で忘れることができないのが、ソ連の崩壊（解体）です。これは、つまるところ、国家の崩壊と構築（ネーション・ビルディング）に関係しています。ソ連崩壊により独立を果たした各共和国は、それぞれにネーション・ビルディンの課題に取り組みました。このような取り組みはロシアでも同様になされ、新たな政治経済システムが導入されることになりましたが、その過程で「ロシアとは何か」が盛んに議論されるようになり、新たなナショナル・アイデンティティの構築にも迫られたのです。

そのような状況下で、ロシアの政治エリートはいかにして国民統合を進めてきたのでしょうか。私はこの点に着目し、ソ連崩壊後のロシアにおける国民統合過程を検討しています。周知のように、ロシアは多民族国家です。その意味で、どのように国民統合を進めていくのかが問題にされました。その際に注目されたのが、「愛国心」「愛国主義」です。2000年に大統領に就任したプーチンは、当初から「愛国心」の重要性を公の場で主張し、「ロシアを統一する精神的紐帯」だとしました（このような姿勢は、現在においても貫かれています）。こうした彼の意気込みから、プーチン政権下では、「愛国心教育に関する国家プログラム」が策定されるなど、国民統合が政権の重要課題だとされています。

今回、ロシア東欧学会研究奨励賞を受賞しました論文は、この「愛国主義」政策を題材にし、政権サイドがいかにして国民統合を図っているのかを解明しました。（受賞に際して、ロシア政治研究で著名な袴田茂樹教授からコメントを頂きました。詳細は、『ロシア・東欧学会 Newsletter』第25号、6頁を参照願います）。プーチン政権は、エリツィン政権とは対照的に、帝政期の三色旗やソ連時代の国歌のメロディーを新たな国歌のメロディーに採用するなど巧みなシンボル操作を行いました。また独ソ戦（ロシアでは、1812年のナポレオン戦争を「祖国戦争」と呼んでいますが、独ソ戦はそれにならって「大祖国戦争」と呼ばれています）での勝利に代表される過去の偉業を映画、文学、歴史教科書など各メディアを通してその偉大さを国民に示し、「愛国心」を鼓舞することで、国民統合を進めました。ところが、2003から2005年にかけて旧社会主義圏で生じた体制変動（いわゆる「カラー革命」）を機に、プーチン政権は青年層を対象にその政策を進め、ロシア社会の統一に努めていきました。今回の論文ではこうした政策を扱いましたが、その対象たる国民サイドの動き（実態）には目を配っていなかったため、現地調査を通じてそれを明らかにする必要性を感じました。

ピョートル大帝像（筆者撮影）。

幸い、2011年から2012年にかけてサンクトペテルブルグ国立大学への留学が叶いました。留学での課題は、まずもって語学力を向上させることでした。特にロシア語は文法が複雑なことで知られており、それを違和感なく流暢に話すのは非常に困難なことです。愚痴を言っても何も変わらないので、とにかくロシア語を話すことを目標に現地へ向かいました。ですが、ロシア到着後に早速問題が起きました。空港に迎えに来ているはずのロシア人学生の姿が無

く、自力で大学の寮まで行くことになりました。どこに何があるのか分らず、道行く人たちにいろいろと尋ねましたが、今思い返してみると、凄まじいロシア語を話していました。語学に関しては数え切れないほどの失敗をしてきましたが、幸い、担当の語学教師の（もの凄く厳しい）指導によって、最初に比べ少しは上手に話せるようになったのではないかと思っています。大学では、語学レッスンの他に、社会学や政治学の授業を受講し、ロシア人学生と一緒に学びました。また、留学期間中はロシア人と意識的に関わるようにし、彼らの思考回路を理解するよう努めました。思考回路と言うと大げさですが、要は、ロシア人のメンタリティーです。

実際にロシア人と付き合っていくと、彼らの「愛国心」の高さに驚かされます。例えば、５月９日の戦勝記念日には、多くのロシア人が国旗を手に持ちながら戦勝パレードを見に行きます（ちなみに、戦勝記念パレードはロシア各地で行われます）。そして、胸に多くの勲章を付けた退役軍人らに「祖国を守ってくれてありがとう」と声をかけます。また、対ナポレオン戦勝～～年記念、プーシキン誕生～～年など彼らは自国の歴史を良く知っていますし、なによりも自国に誇りを持っています（これは誇張しすぎているのかもしれませんが、日本人の感覚からすれば、彼らの「愛国」意識は非常に高いという気がします）。世論調査を見ても、８割以上のロシア人が自身を愛国者とみなしているほどです。もっとも、こうした意識は、政権の政策によって醸成されますが、他方でロシア人が営む日々の生活からも作られるのです。例えば、戦勝記念パレードが行われているとき、親が子供に「あの人たちが国を守ってくれた」と退役軍人らを指さし、彼らに花を渡すように促します。花を受け取った退役軍人は子供の頭を撫で、微笑みかけます。こうした光景を実際に見て、ロシア人が待つ自国への誇り、祖国愛なるものを理解できたような気がしました。

パレードに参加する退役軍人（筆者撮影）。

では、そもそもロシア（政治）研究を行う意義はどこにあるのでしょうか。それは、ロシアが日本の隣国であるということに大きく関係しています。「遠い隣国」という言葉で譬えられるように、ロシアは日本から地理的には近いものの、いろいろな面で特異（政治経済システムなど）であることから、「不思議な国ロシア」などと思われがちです。ロシアの詩人でもあり、外交官でもあったフョードル・チュッチェフはこの点について以下のように述べています。

ロシアは頭では理解できない
並みの尺度では計れない
ロシアだけの特殊な体躯があるから――
ロシアは信ずるしかない
（川端香男里『ロシア――その民族とこころ』講談社、1998年、23、271頁）。

外国人には分らない何かがあるのでしょうが、私は可能な限り「等身大のロシア」を浮き彫りにするように努めています。その意味で、ロシア（人）は何を考えているのか、何を欲しているのか、つまり「ロシアの論理」「ゲームのルール」（武田善憲『ロシアの論理――復活した大国は何を目指すか』中公新書、2010年）を読み解く必要があると思っています。まさに、この点にこそロシア（政治）研究を行う意義があるのではないでしょうか。

現在、私は博士論文の執筆に励んでいます。ロシア研究（あるいはスラヴ・ユーラシア研究）は世界的になされており、非常に恐ろしい世界に身を投じてしまったと思うことが多々あります。その反面、「よく分からないロシア」を明らかにしたい（理解したい）という気持ちにも駆られ、現在まで研究を続けております。「強権」「独裁」「恐怖」などの言葉で形容されがちなロシアですが、まずはそのようなネガティヴな視点から距離を置き、「等身大のロシア」を明らかにしたいと思っております（このように書くからといって、ロシアのあらゆる側面を肯定的に捉えているのではありません）。

そして、何よりもこの不真面目な私を常日頃から叱咤激励してくださる先生方、特に松井康浩先生、大河原伸夫先生、岡﨑晴輝先生にこの場を借りて感謝申し上げます。先生方のご指導があったからこそ、今回の研究奨励賞の受賞があったと思うのです。

『政治的アイデンティティの人類学－21世紀の権力変容と民主化にむけて』(2012年、昭和堂)

太　田　好　信（編）
（文化空間部門　アジア社会講座）

本書は、平成19年度国立民族学博物館共同研究（公募）の一つに採択された「『政治的アイデンティティ』とは何か？解放運動としての先住民運動」の成果報告書である。共同研究会は、平成22年度末まで継続し、成果発表はその1年後であった。出版事情の悪化にともない、共同研究会の成果を商業出版により世に問うことは簡単ではなくなりつつあるなか、出版を快諾していただいた昭和堂の皆さまには、いまでも頭が下がる思いである。

さて、本書は共同研究会の成果報告という性格上、多様な方向性をもつ論文が編まれているが、それらを要約する作業は私には荷が重すぎる。編者・代表者ができるのは、共同研究会を構想するに至った経緯を回想し、それを現在という時点において解釈し直すことくらいである。

この共同研究会を構想し始めたころ、著名な社会学者による『脱アイデンティティ』という編著もすでに存在し、文化人類学においても、アイデンティティは「有効期限切れ」であるといわれているようだった。この概念は、すでに発達心理学から遠い領域へ移動し、人間を拘束する牢獄のようなもの、解放されるべき何かとして理論化されているという。

しかし、誰にとってアイデンティティは不要なのだろうか。なぜ、現在、アイデンティティと政治が節合するとき、その節合は「アイデンティティの政治」という表現が示すように、否定的意味しかもちえないのか。そういう評価を下す私たちの政治理念とはどのようなものなのか。

たとえば、「人種は無意味だ」というカラー・ブラインド主義は、権利の平等を前提にする社会を築く最善の発想だという。しかし、カラー・ブラインド主義は人種による構造的差別が継続するとき、それに抵抗する論拠を失うことも意味する。「人種は無意味だ」という発話は、皮膚の色により構造的排除の対象となっている人びとにとっては解放を約束するどころか、むしろ受け入れがたい主張であるはずだ。

この点に気づけば、人種というアイデンティティと政治との節合は拘束や抑圧しか生み出さないわけではないこと、またそれへの反動として、カラー・ブラインド主義が唯一の選択肢ではないこともわかる。もし、私たちが、それは唯一の選択肢だと自然に感じるとすれば、それは私たちの特権的立場が自然化さているにすぎない。

いま述べた問題意識を共同研究会参加者と共有し、21世紀になりますます無視できないアクターとして近代へと回帰してきた先住民たちの世界史的意義について考察したかった。つまり、しばしばリベラル民主国家では、多文化的市民権をめぐる課題として扱われてきた先住民の存在だが、私は「先住民」を近代国家内で文化的実践により排除されてきて人びとして位置づけ、近年の先住民運動について考えてみたかったのである。その結果は、必ずしも、満足できるものではなかった。

ただ、今回の成果報告を編む過程における副産物もある。それは、アイデンティティの理論化において現れる、社会・歴史的制約から離脱し、普遍的理性の発露として自己の思考を位置づけようとする欲望の強さを自覚できたことだ。その欲望は、理論の確信となる。知らず知らずのうちに、私もその欲望を自然なものとして受け入れてきたのかもしれない。では、この欲望を自覚し、それに屈しないためには、どうすればいいのだろうか。どうすれば、理論の確信を疑うことができるようになるのだろうか。これらの問いへの解答は、理論を批判する個々の実践において示されるだろう。この自覚は私にとり一つの成果として残った。

ISBN 978-4-8122-1166-3
定価　4,900円＋税

○○○ 海外レポート

ソウルでの１年間

波　潟　　剛
（文化空間部門　文化構造講座）

私は2011年10月から2012年８月までの11ヶ月、日韓文化交流基金派遣フェローシップによる支援を受け、ソウル大学日本研究所に身を置き研究に取り組んだ。研究の課題は「1930年代の東アジア地域間にみる文化の交渉と翻訳――モダン都市東京・ソウルと文芸――」。滞在先に選んだソウル大学日本研究所は、社会学、政治学、経済学、文化人類学等、おもに社会科学に関わる研究者が所属している機関である。だが、文学研究者も在籍しているし、幸い研究補助者として国文学科の大学院生もいた。ソウル大の国文科にいきなり飛び込む勇気もない私にとってはありがたい場所だった。それだけでなく、ふだん日本国内で日本の文学を研究している日本人の私が､韓国において｢日本｣､そして「文学」がどのように研究されているのかを知り、考える貴重な機会となった。

（日本研究所が入っているソウル大学国際大学院棟）

韓国に滞在するのは今回が２度目。前回は1998年から99年にかけてだった。同じソウル市ではあったが、そのときは北東に位置する高麗大学。今回は南西にあるソウル大学であったため土地勘もないし、生活するうえで何かと変化していることも多く、慣れるのに手間取った。長く住むには必須だからと携帯電話を購入しに行けば、機種はスマホしか置いていない状態。通常の携帯電話でさえもまともに操作できない私に取っては難敵となり、格闘の日々が続いた。IT国家といわれるだけあって、研究環境も情報化が進み、学会機関誌はほとんどが雑誌の発行と同時にインターネット上でPDF版が公開されている。加えて、博士論文も大学図書館からダウンロードできる状態。図書館をいかに効率的に利用するかということだけでなく、ネットでの情報をいかに獲得するかという訓練にもなった。

季節は秋から冬になり、ようやく研究資料の入手方法が理解できた段階で、各種学会、研究会にも顔を出すようになった。国文学でも多くの学会が存在することを知ったが、参加した学会で話をしてみると、想像以上に日本語を理解する若手研究者が存在することが分かった。これは印象の域を出ないのかも知れないが、98年に留学していた当時は、韓国において植民地時代の文学を日本文学の影響下にあるという前提で国文学を研究することにはさまざまな困難があるように見えた。また日本語を駆使できる若手の韓国人国文学者もそれほどいなかったし、日本語習得の必要性もさほどないように認識した。もちろんその当時の私の韓国語は今よりもさらに拙かったし、交友範囲も限られていたので覚束ない部分もある。だが、自主的な勉強会で雑誌『詩と詩論』を輪読しているのが韓国の日本文学研究者ではなく、国文学者のグループであることも珍しくない現在とは、時代の差があったと個人的には思っている。

（この日のソウルは最低気温が零下17度、最高も零下10度）

学会、研究会については、国文学系に限らず、日本文学、日本文化に関わるものにも数多く参加した。日本関連の学

会で話題になっているのはやはり「震災」だった。2011年３月11日の衝撃は半年後も消えることなく、関心も非常に高かった。そのため、日本国内からさまざまな専門家が招待され講演やシンポジウムが開催されていた。翌2012年になってもその傾向は変わらず､学生たちの日本語離れ、留学の敬遠といった切実な問題とも関わって、どの会場でも議論が熱く交わされていたことが、今でも記憶に残っている。

こうして学会や研究会に一般参加者として暢気に傍聴できた時期は長く続かず、間もなく自ら登壇する機会が増えた。発表の場を与えられることはもちろんありがたいことだったが、思った以上にスケジュールが増えてしまい、研究漬けの毎日を「十分」に「満喫」することに……。

客員研究員として受け入れ先となってもらったソウル大学日本研究所でのセミナーや、高麗大学日本研究センターのコロキウム、韓国日語日文学会のシンポジウムに、韓国日本研究団体第１回国際学術大会のシンポジウム、さらには一時帰国しての日本比較文学会におけるワークショップと、矢継ぎ早に発表を行った。また、部局間交流協定を締結している東義大学や、十年来の知人が教員として働いている極東大学においても講演を行った。

その間、ある意味当然のことながら、九大の院生たちはほったらかし。Facebookでお互いゆるやかに消息を伝え合ってはいたが、１年という期間、彼らがそれぞれどのように研究を進展させていくのか心配もあった。そこで、2012年の２月、ソウルと福岡の中間地点になる釜山で波潟ゼミを開くことにした。開催にあたっては計画に関わった韓国人院生たちが知り合いなどを通じて費用を安く抑える努力をしてくれたし、東義大学の権赫建先生とやはり部局間交流協定を締結している釜慶大学の尹一先生がゼミ室を提供してくださった。非公式な場であったにもかかわらず快諾していただいたご好意に感謝している。

不在中多少の面倒を見たといはいえ、院生たちに迷惑をかけたことは間違いない。多少ともその分は取り返そうと、帰国してからのゼミには満を持して取り組み、教材の選定、発表の進め方をかなり改善し、全体を通してそれなりに上手くいったと思っている。いまのところはこれくらいで勘弁してもらえたらありがたい。

迷惑をかけ続けたのは比文の先生方についても同様である。松本先生や西野先生をはじめ、教務・学生委員長だった中野先生など、何かと協力していただいた結果、長期滞在が実現した。先生方へのせめてもの償いは、2012年７月に開催されたソウル大学社会学科との交流会で会場校となるソウル大学にいた私が多少なりともお手伝いができたことだろうか。院生の発表を中心にした学術交流も大詰めとなり、この広報誌が出来上がる頃には韓国語での論文集が出版されているはずである。無事年度末刊行が実現することを祈っている。

（ソウル大学正門）

生活全般の準備や、引越しなどの後始末を含めてまるまる１年間滞在することになったソウル。妻と幼稚園児の息子を日本に置いての１人暮らしということもあって、時には手持ち無沙汰になって宿舎のすぐ裏にある山に登ってぼおっとしている時間もあった。しかし、１日を無駄にしたと後悔する日はなかったし、消耗しただけで無意味に感じたという日もない。むしろ気になっているのは、集めた研究書や論文、1930年代の雑誌、新聞記事がぎっしり詰まったダンボールが、いまだに帰国当時のまま研究室に積まれていることである。破損がないか確認するために一応蓋はあけたが、ほとんどはそのまま何も手をつけていない。果たしていつになるのやら。

（裏山から見たソウル大学）

九州大学留学から帰国就職二十年の栞
―比文叢書『異文化を超えて―アジアにおける日本再考』出版に寄せて―

徐　興　慶
（台湾大学日文系教授）

1992年９月に九州大学での留学を終え、帰国してから、ちょうど二十年の歳月が経ちました。やはり早いという実感が湧いています。帰国後最初の十年間は、私立の中国文化大学に奉職し、育児、教学さらには研究に従事しながら、大学行政と国際交流の仕事にも追われ、多忙でした。孔子曰く、「吾三十にして立つ、四十にして惑はず」を痛感した生涯でしたが、知らないうちに「天命を知る」五十の後半に差しかかっています。

思い起こせば、九大文学部国史学科での研究生活とは、古文書（候文）の解読に明け暮れながらも、その意味が半分も取れないゼミ授業の怖さ、そして、午後三時頃まで続く授業が終了してやっとありつける昼食の美味しさに尽きていた感じがします。そしてそれは、人生の転換期に位置付けることができるように思います。

九大箱崎キャンパス北門の「楷樹」

2012年４月23日に資料調査のため、家内と共に久しぶりに九大（箱崎）を訪れました。北門から入り、小さな噴水池を懐かしく見やりながら、今は亡き恩師中村質先生ゆかりの「楷樹」を見上げ、恩師が植えられた樹が立派に成長している様子に、「前代の人が木を植え、後代の人が木陰を享受する」ことが意識され、感無量でした。留学生活の思い出、足跡に多くの九大人、事、物に思いを馳せたことでした。

九州大学以外の日本生活

1997年３月から二年間に亘る天理大学での生活（交換教授）も、大変充実した時間でした。二人の子供を天理小学校に通わせましたが、水泳、ジョギングなど、鍛えられた成長ぶりに、言葉に表せないほどの感謝を抱いたものです。勤務時間外には、吉野山の奥まで分け入って川釣りを楽しんだり、家族全員で北海道への一周旅行へ赴いたりと、異国情緒、異文化体験といった外国での研究生活の意義、さらには家族の絆を再認識させてくれる上でも貴重な場、機会となりました。

2011年10月から一年間は、京都にある国際日本文化研究センター（日文研）の外国研究員として赴任することになりました（台湾大学日本語学科主任、所長を務めた過酷な三年間に対するご褒美と言えるかもしれません）。海外の優秀な研究者を育成する機関たるこの「日文研」において、私は台湾の日本研究に携わる一員として、文化、学術交流を進めながら久しぶりの落ち着いた研究環境に恵まれました。「日文研」は24時間体制で図書館の利用ができるほか、他の施設との相互利用のシステムも整っています。また毎週のように異なる分野の研究会が開催され、さまざまな関心を持つ日本人の研究者、外国人研究者と出会い、交流することができました。同時に、古都京都の散策を通して日本文化の源流に頻繁に触れることもできました。

東日本大震災に際して：日台民間交流を考える

2011年12月に、東アジアの研究者、文化人、ジャーナリスト、約四十人ほどが、東日本大震災被災地の仙台、松島にて一堂に会するフォーラムが開催されました。それは、日本の国際交流基金主催の「東アジアは3.11をどう論じたか」と題するもので、アジア各国から東北復興へのメッセージを送ることを企図したものです。私は「9.21台湾大地震、3.11東日本大震災から学んだこと」と題して、自分なりの感想を以下のように述べました。

「天地、水火は無情であると古来より言われてきたが、その一方で人類は古くから天を信仰し地に寄って生活してきました。水火は人間の生活には欠かせないものであって、台風もまた台湾にとって最も重要な水源ではあるものの、毎年のように何らかの災害に襲われています。つまり「愛憎相半ばする」存在であると言えましょう。災害が起きるたび、大自然の計り知れない力やその神秘について今を生きる私たちは改めて思い知らされることになります。そして、地震、台風、土石流など不可避の天災が起きた時に、常に私が感じるのは、国境を越えて示される「助け合う精神」の尊さです。今回、東日本にて発生した地震後の救援活動、復興作業に関わる人的、物的支援に鑑みる時、国籍をまったく問わないその人類「愛」は、東アジアに共通する学術的素養としての儒教の「仁」と「義」の思想が依然として強く根付いていることを思わせます。そこには、目に見えるものと見えないものとが交わる「譲」の精神が溢れており、私は強く心を動かされました。」

「人定勝天（人定まりて、天に勝つ）」という中国古来からの言葉がありますが、ここ十年ほどの間に地球に起きた天災を見ると、人は努力すれば自分には勝てる、あるいは「先んずれば人を制す」ことができるかもしれないが、人類が天に勝つことまではできないことがわかります。私が生まれた、五十年ほど前の故郷埔里（台湾の中心部、海抜約600ｍ、人口約十万）の自然を振り返ってみますと、山に囲まれ、鉄道が通じていないこの山城から、六十キロほど離れた台中まで曲りくねった山と川を通り抜けて行く「公路局」のバスは約二時間を要し、交通は大変不便でした。しかし、道中眼前に広がる山、緑、水（埔里は紹興酒の名産地として知られる）などの大自然は、いずれもありのままの姿で迫り、実に美しいものでした。あろうことか、埔里は1999年に発生した9.21大地震の震源地となり、私が幼い頃に建てられた我が家の「三合院」は写真一枚残されることなく「全壊」しました。十年以上を経た今では、観光や交通の便が図られ、台中と埔里は立派な高速道路（国道６号線）で結ばれ、僅か25分で行き来ができるようになりました。しかし、この新しい高速道路には断層帯を貫くトンネルが三本通り、高架橋の全長は26.4kmにも及びます。今後如何にして環境を保護し、偉大な「天」たる大自然と共存できるのかが重要な課題となるでしょう。

21世紀の東アジアの国際情勢を見渡せば、時には接近し時には離れながらも、災難に遭遇すれば互いが助け合う精神を発揮するなど、総じて非常に距離が近くなっていると感じています。私たちは、3.11東日本大震災を通して表現された日本人の落ち着き、忍耐力、立ち直る力、勇気に心から感動させられました。「助け合う精神」をこれからもずっと発揮してゆきたいと願っています。

「天命を知る」、「耳順」には何をすべきか

2003年８月には、台湾大学日文系にも修士課程が設置され、2011年７月からは、人文社会高等研究院に「日本、韓国研究プラットフォーム」が発足、さらに「日本研究叢書」の刊行も開始されました。こうした教育研究表裏一体の環境が整いつつある中で、私は一教員（研究者）として、残りの人生を、初心を忘れず台湾における日本研究に邁進するとともに、次世代の人材育成にも積極的に取り組んでいく決意を新たにしています。2012年７月には、台湾に生活する“九大人”たちの努力により、「九州大学台湾校友会」が発足する運びとなりました。これからのグローバル社会を見据えながら、日台文化交流の促進にも微力ながら尽くしていきたいと考えております。　（2012.5.28記）

2010年４月に九大伊都キャンパスにて開催された台湾大学日文系所（日本語日本文学専攻の学部、大学院を指す）と九州大学比較社会文化学府との共同研究会の成果、比文叢書22『異文化を超えて―アジアにおける日本再考』（2011、花書院）出版の記念として、徐先生始め、同じ台湾大日文系の范淑文、林慧君、曹景惠、姚丞倫の各先生から温かい祝賀の言葉を頂きました。また、林慧君先生には、研究会開催から叢書出版等々、事務・連絡の煩瑣な仕事を一手に引き受けられ本当にお世話になりました。ここに記して感謝の気持ちを表します。

（著者の徐興慶先生は、九州大学文学博士。主要著書に、『近代中日思想交流史の研究』（2004）、『台湾における日本漢文学研究の現状と課題』（2005）、『朱舜水與東亞文化傳播的世界』（2008）などがある。）　（秋吉　收整理、附記）

比較社会文化学府主催 FD・SD研修
（共催：比文同窓会／協力：九州大学キャリア支援センター）

松　永　典　子
（日本語教育講座）

2012年９月28日（金）午後２時～５時、伊都キャンパス・センター１号館１Ｆ第１会議室にて、九州大学大学院比較社会文化学府（以下、比文）の教職員・在校生・同窓生が一堂に会し、比文学府主催のFDSD研修を開催した。本研修は、教職員の研修と「院生の研究及びキャリア形成に対する支援体制を強化する」という目的のもとに実施された。

研修の概要

第１部は2012年度より福岡市博物館館長に就任された有馬学氏（比文の第２代研究科長）を招き、比文設立の経緯や大学が今後、地域社会でめざすべき社会連携の方向性について示唆に富んだお話を伺った。

第２部は「中国人留学生の就職とキャリア形成」について、比文教員、日本企業で活躍している比文同窓生、就職が内定している留学生、キャリア支援カウンセラーといった多角的な視点から、就職活動や大学院での知の形成、キャリア形成について話していただいた。

研修の構成

■開会の辞　　挨拶：服部英雄（学府長）
■第一部　講演「比文の学際性と地域社会への貢献」
　有馬学氏（福岡市博物館館長・九州大学名誉教授）
■第二部　「中国人留学生の就職とキャリア形成」
・「中国人留学生の就職状況の概観」：阿部康久（比文准教授）
・「比文での研究とキャリア形成」：邱菲（キュウヒ）氏（比較社会文化学府博士課程１年）
・「日本の企業で働くということ」：陶晶（トウショウ）氏（パナソニックシステムネットワークス株式会社）
・コメント：蔵元英一カウンセラー（キャリア支援センター）
■全体質疑
■閉会の辞　　挨拶：三隅一百（教務学生委員長）

研修のまとめ

院生、教職員、同窓生を含め、約40名の参加があり、留学生のみならず、日本人院生からも就職・キャリア形成に対する不安や疑問点が提起され、活発な質疑応答がなされた。

同窓会が準備してくれた手作りの懇談会にも多くの参加者があり、知的研鑽の場、交流の場としてこの研修会が機能していく可能性を感じた。以下、講演者・留学生・社会人院生、それぞれの感想・コメントを紹介し、研修の総括としたい。

研修参加者の感想

A：日本社会文化専攻・修士課程２年・新井克之

この日の講演会のメインテーマは「比文の学際性と地域社会への貢献」。講演者の有馬学氏は山本作兵衛氏の炭坑絵画をその例に挙げる。作兵衛の絵は昨年ユネスコより世界記憶遺産としての認定を受け、一躍脚光を浴びているが、水彩で描かれたその作品群は耐久性に乏しく、そのまま展示して無闇に劣化させてはいけない。けれどもまた、そもそも炭坑現場の様子を人々に伝えるために描かれたものであって、博物館の倉庫に後生大事に眠らすことは作品の本意ではない。有馬氏は学術機関の本質的な地域貢献は「価値の根源を問う」ことにあるという。はたして、作品を保存すべきか、展示すべきか。アンビバレンツな課題にたいして、我々は安易な結論に安住せず、社会と共に考え続ける責務がある。言い換えれば、その「根拠」を根気強く問い続けることにこそ、「比文」の社会貢献があるのだ。講演会を終えて、キャンパスより伊都の山並にうつろう夕景を眺めてから私は、あらためて研究机に向かうことにした。

B：日本社会文化専攻・博士課程１年・邱菲（キュウヒ）

留学生が就職活動を進めていく上で重要だと思うこと

は、「語学力」と「異文化理解能力」です。私の就職活動を振り返ってみると、企業の履歴書はもちろん、面接も全て日本語で行われ、集団面接で日本人と同じ組に入れられることも頻繁にありました。必ずしも綺麗な表現が求められるわけではありませんが、自分の考えや想いをしっかり相手に伝えられるように日頃から練習しておくことが大事だと思います。さらに、日本語以外に英語ができると非常に有利です。

また、日本企業は留学生の日本文化への適応力も観察しています。留学生は自己主張の強い方が多いと思いますが、日本企業はチームワークを重視するので、一方的に自分の考えを主張するのではなく、他人の考えも汲み取って意見を述べることが必要です。

最後に、「なぜ日本で働きたいか」をしっかり考えてください。これは面接で必ず聞かれる質問ですし、この答えは、長期間の就職活動を戦っていく上での自分の支えになると思います。

C：パナソニックシステムネットワークス株式会社・陶晶（トウショウ）

今回の研修会に参加させていただきまして誠にありがとうございました。前半有馬先生の講演を伺いまして自分自身が出身の比文の歴史と流れについて非常に勉強になりました。より一層誇りを持つようになりました。

後半留学生の就職とキャリア形成について自分の経験談を発表させていただき、後輩の皆様にアドバイスをする一方社会人になってからの振り返りにもなりました。また、ほかの発表者と内定をもらった院生たちの話から新たなアイディアを頂き、良い刺激を受けました。私にとって非常に有意義な研修会でした。

そして、後輩たちの質疑から皆さんは就職活動に非常に不安を持っていることを感じました。ここで現在就職活動をしている方、これから就職活動をしようと思っている方、内定をもらって不安を持っている方に少しでもアドバイスが出来ればと思い、ポイントをまとめました。

Ｑ１：就職活動についてどうしたらいいでしょうか。

Ａ１：就職活動をする人たちはみんな同じ不安を持っています。先輩の話を伺い、就職活動の本を読み、不安を持ちながら進めていくうちに分かってくるようになります。

Ｑ２：在留資格変更の手続きについてどうすればいいでしょうか。

Ａ２：会社により異なりますが、必要書類を説明してくれない会社であれば基本入国管理局に確認します。特に外国人を初めて採用する会社の場合には注意する必要があります。

Ｑ３：どんな会社に応募すればよいかが分かりません。

Ａ３：文系出身の私達は特にこのような悩みを持っています。まず、自己分析をしっかりし、業界を絞った上で業界と会社分析をしっかりしてから自分が入りたい会社、あるいは受入れられる会社が分かるようになります。

Ｑ４：日本企業で仕事をする上で注意することは何でしょうか。

Ａ４：会社によって異なりますが、共通点を何点か挙げます。

・礼儀正しいこと
・時間と約束を守ること
・ホウレンソウをきちんとすること
・失敗を恐れずチャレンジ精神を持ちながら挑戦すること
・相手の立場に立って物事を考えること

まだ入社三年目の私もいろいろ分からないことがたくさんあります。一人だけではなくたくさんの方の意見に耳を傾け、衆知を集めたほうが良いと思います。

皆さん、粘り強く最後まで頑張ってください。必ず夢を叶えられます。

D：日本社会文化専攻・修士課程１年・朱磊（シュライ）

本日の講演会では大変有意義な時間を過ごさせていただきました。一番印象深いのは、「中国人留学生の就職とキャリア形成」をめぐって、阿部先生、邱菲さん及び陶晶さんの発表でした。邱菲さんは電源開発株式会社から内定をもらったばかりで、陶晶さんはパナソニックシステムネットワークス株式会社に入社して三年目になりました。

競争が激しくなってきた就職活動で、二人が勝利を手中に収めたコツは何でしょう。「“心急吃不了热豆腐”という中国語の諺があって、日本語に訳すと、“急（せ）いては事を仕（し）損（そん）じる”になる。先を急がないで、専門知識を深め、一歩一歩着実に進めることが大切だ」と邱菲さんが言いました。それを聞いて、心を打たれました。チャンスは準備のできた人のところにやってきたのです。講演会の後、諸先生方、先輩達の皆さんと交流することができ、大変意味深いお話も聞かせて頂きました。自分の専門分野の中で、まだまだ学ぶことは数えきれないくらいあるのを改めて実感しました。これからどんな仕事をしたいのか、何を身につけたいのか、そんなことをじっくり考え、目標を決め、それを目指して頑張りたいと思います。

今回の講演会に参加でき、授業では触れることができない話題にふれることができて非常に良かったと思います。大変勉強になりまして、本当にありがとうございました。

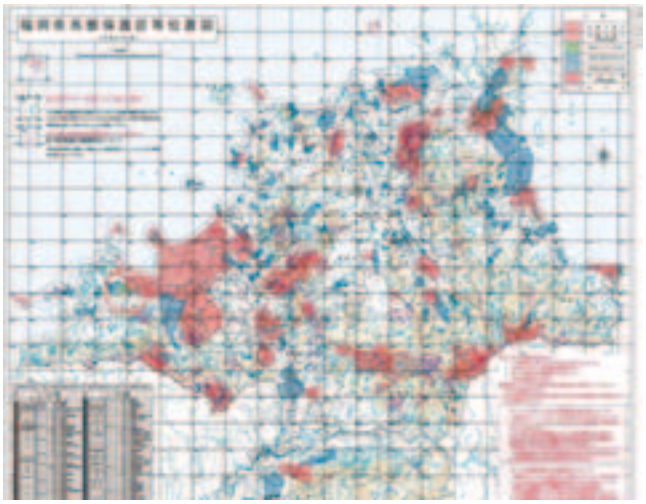
○○○ 学内レポート

今津干潟周辺のレンコン畑と鳥害被害についての調査を行って

王　　廷　卓
（比較社会文学府　日本社会文化専攻　修士課程）

私は中国の自然保護区について研究を行っているのですが、阿部康久先生の調査研究方法論の授業の際に、現在住んでいる日本九州の福岡県の保護区について興味を持ち、この調査を行うことにしました。

調べてみると、福岡県内には数多くの鳥獣保護区や国定公園などが点在していますが、他になぜか休猟区が一ヶ所だけ存在していることが分かりました。そこは、北部海岸線にある博多湾今津干潟の瑞梅寺川下流域です。今津干潟は、2億年以上前からその形を変えないまま現在まで生き延びている「生きている化石」と呼ばれるカブトガニが生息しているだけではなく、クロツラヘラサギなどの野鳥の宝庫としても知られています。そこでは博多湾のほぼ全域が含まれる広い範囲が鳥獣保護区に指定されていますが、なぜこの地域だけが鳥獣保護区でなく、休猟区になっているのかという点に興味を持ち、電話インタビューなどを通して情報収集を行いました。それによると福岡市は平成９年に、今津干潟地域の瑞梅寺川下流域を鳥獣保護区に含めようとしたのですが、その時、その地域には鴨によるレンコン畑への被害が出ているため、地域住民が鳥獣保護区を設置することに反対したようです。



（西日本地図出版株式会社による平成23年度の福岡県鳥獣保護区等位置図；赤い丸の中に緑の部分は休猟区を示されています）

2012年６月に阿部康久先生と一緒に福岡市市役所に伺いました。この問題を担当している職員の小林さんという方が、色々な話を聞かせてくれました。

話によると、まず、鳥獣保護区と休猟区の区別について、期限と目的から見ると、鳥獣保護区は一般的に20年以内の期間指定されるのに対して、休猟区は一般的に３年以内の期限で指定されるとのことです。ただし、休猟区も期間後に延長更新することが可能とのことです。目的は大体同じで、野生鳥獣の繁殖、保護を図ることにあります。区域内での制限を見ると、両者とも区域内においての鳥獣の捕獲は禁止されますが、その他には保護区のみにある制限としては、保護区区域内の立木竹に巣箱、給水、給餌施設などを設けることを土地所有者は拒否できないという点があります。また、保護区の場合は、設定にあたっては、利害関係者（市町長、農協、森林組合、自治会など）から意見を聞く公聴会を開催しなければなりませんが、休猟区を設定するには、公聴会は開催しなくてよい、ということが分かりました。

以上のことから、保護区にできなかった範囲については、休猟区に指定することで、事実上の保護をしていることが分かりました。また、行政側は鳥獣保護区に設定することを望んでいましたが、鴨による被害が出る農家からの反対意見があったので、結局地域住民の理解が得られず、保護区を設置することができなくて、そこで３年を期限とした休猟区を設置したということです。

（休猟区の境界に立っている看板です）

次に、この地域における現在の状況について、お話をうかがいました。小林さんの話によると、本来、休猟区は鳥獣が減っている地域で一時的に休猟を行うという趣旨なので、長時間指定することはできないのですが、現在も、この区域は休猟区への指定を更新しています。平成23年11月にも、休猟区として延長更新（３年間）しました。また、現在は今津干潟懇話会や協議会という会が平成15年度から毎年開催されていて、懇話会などを通して、地域住民の方に理解を深めてもらっています。ほかに、平成22年９月に、環境省により、今津干潟はラムサール条約にて指定されるべきと認められる湿地に選定されました。今後、ラムサール条約指定地として登録するためには、国際基準を満たすだけでなく、地元の賛成と鳥獣保護法、自然公園法などの国内法による保護措置が必要になりますが、この地域においては、ラムサール条件登録条件の一つである地元住民などの登録への賛成が得られていないことが分かりました。

以上のことと前述した鳥獣保護区の制限から見ると、地元住民は鳥獣保護区ばかりでなく、ラムサール条約への登録さえ反対しており、原因の一つとしては、住民生活への影響が及ぶことが懸念されているためのようです。

では、15年前の鴨によるレンコン畑への被害について、現状ではどのようになっているのでしょうか？とても気になったので、私は2012年９月初旬、現地での調査を行いました。

まず、この地域におけるレンコン畑の全体像をつかむために、現地を一周しました。小林さんは昔この地域にレンコン畑がたくさんあったとおっしゃいましたが、現在ではレンコン畑は僅か８～９軒のみがまばらに散らばっているだけであることが分かりました。

次に、レンコン畑で作業をやっている農家の方に聞き取り調査を行いました。とても優しい方で、手を休めて、いろいろと私に語ってくれました。お話によると、この地域では昭和40年ごろ、つまり50年くらい前から、地元の農家が相次いでレンコン畑を造り始めたとのことです。この地域の土地が良いため、レンコンがよく収穫できて、その時には何十軒ものレンコン畑もあって、良い景色だったと農家の方は話してくれました。話によると、後継者不足のため、その後、段々レンコン畑を手放す家が多くなってきて、現在10世帯前後しか残っていないことが分かりました。

鴨によるレンコン畑への被害について尋ねると、その前に農家の方がレンコン栽培の過程を簡単に説明してくれました。この地域においては、毎年４月からレンコンの栽培をはじめます。植え付ける前に、まずレンコン畑を清掃して、水を張り、その後、何度か代掻きを行います。次に、前年レンコン畑に残しておいたレンコンから種レンコンとして利用するものを選んで、４月上旬代掻き後、土の落ち着いた畑にレンコンを植え付けます。５月頃から除草作業を行い、肥料を与え、生育を促します。この頃には浮葉が生えてきて、葉がどんどん大きくなってきます。９月花芽が形成されてきて、10月に収穫を行うことが分かりました。

そして、農家の方の話によると、４月にレンコンを植え付けて、発芽すると、鴨はその新芽が好物で、よく食べにきます。15年前の鴨によるレンコン畑への被害はこのような理由で起こりました。しかし、そのあとレンコン農家たちは対策を考えたそうです。それは４月にレンコンを植え付けてから鴨に食べられないように、畑の上にビニールトンネルをかけることです。このビニールトンネルは５月中旬に浮葉が大きくなるまでずっとかけておきます。そうすると、鴨の被害が解消したとのことです。

（先端の新芽は鴨の好物です）

それでは、現在レンコン畑には、他にも問題があるのかという点を農家の方に聞きました。実は鴨害以外にも、「草害」というものもあるらしいです。お話によると、この地域のレンコン畑には雑草が生えてくることがあり、その草の葉は横からは三角に見えるから、地元の人は「三角草」

と呼んでいます。この草の根は「長く」、「多く」、「大きい」、繁殖する面積も大きい、速度も早いという特徴があって、除草作業を行う時にどんな抜いても、すぐまた生えてくるらしいです。

（煩わしい雑草の「三角草」です）

最後に、農家の方は「将来的には、後継者がいないことが心配です。うちには息子が１人しかおらず、その子はレンコン畑をやりたくないと言っているので、このレンコン畑は私の代で終了するかもしれない」と語っていました。実は、レンコンの収穫作業はレンコン栽培の一連の流れにおいて最も難しい作業と言えます。この作業は、レンコンを傷つけないよう細心の注意が必要であり、畑の水を抜き、表土をはぎ取った後、地表に出ているレンコンの芽の向きから地下茎の向きを予測し、丁寧に鍬を入れて、折れないように完璧に取らないといけません。レンコンは水田のような泥中の深くに根を張っています。意外にもわずかな力でも折れやすいので、機械での収穫は不可能で、完全に手作業でやるしかありません。不適切な部分を折ってしまうと、そこから泥が入り込んで、レンコンの穴の中が黒くなって、商品価値が下がってしまいます。このようなレンコンはスーパーなどでは見かけることすらないのですが、完璧な見た目が維持されたレンコンの方が高く売れるのだそうです。このように土に埋まっており、泥の中から折らずに収穫する作業をするには、ある程度長い経験と、高い技能が必要です。そして、泥に入ると腰近くまでつかることになるので、足を１歩進めるにも相当な体力が必要です。しかも、体中泥だらけになるということで、もう本当に大変な重労働作業なのです。農家の方が私に説明するために１本のレンコンを取って下さりましたが、たった１本のレンコンを取るのに、汗がぽたぽた流れていました。農家の方に心から御礼を申し上げたいと思いました。

高齢化と少子化の進展の中で、体力と技能が求められるこの地域におけるレンコン畑の未来はどうなっていくのか、今後も関心を持ち続け、見守っていきたいと思います。

（取材させて頂いた農家の方の綺麗なレンコン畑の風景です）

思えば遠くに来たもんДa(ダ)？

東　出　　朋
（日本社会文化専攻　修士課程）

1．はじめに

Здравствуйте, дорогие друзья！（ずどぅらーすとぅぶぃちぇ、だらぎぃぇ　どぅるぢぃぁ！）

気がついてみれば早一年。一年前のちょうど今頃、突然の大学院入学の知らせを聞いた友人や家族の反応は次のようなものでした。「なんで、２年もロシアへ留学した上、やっと早稲田の露文を卒業したと思ったら、なにゆえに大学院へ行って、まだ勉強するの？」「大学院へ行ったら、その後何かいいことあるの？その後はどうするの？」「このご時世、修士号を持っている人は大勢いるわよ。その人達だって仕事探すのが大変なんだから、学部卒でも構わないんじゃない？」等々。彼らの至極全うな意見。しかし私は九州大学比較社会文化学府の学生として今ここにいます。

2．私にとっての学ぶこととは

そもそも、大学院とは何をする場所でしょうか。大学院で学ぶことの意味は何なのでしょうか。「大学（院）で勉強して、その後なにかいいことあるの？」という質問の前提には、「学び」による利益、つまり「努力に対する将来的リターン」の経済的損得勘定が働いているのでしょう。英語を勉強して外資系の企業に就職する。簿記○級を取って税理士になる。このような「学び→ハイリターン」を求めるのなら、多くの学問の意味はなくなります。どうしてこの時代に甲骨文字を知る意味がありますか。鳥が空を飛ぶのはなぜかについて思いを馳せるのは意味のないことでしょうか。しかし、ほとんどの基礎研究しかり、そもそも「学び」に対するリターンはすぐ目に見えて現れるものではないはずです。今の「学び」が（もしかしたら）実を結ぶ（かもしれない）のは、10年、20年、50年先だって良いわけです。今「学ぶ」ことが知的好奇心を満たし、知的快楽をもたらすのであれば、十分に「学ぶ」価値があると思います。知的快楽を生みうる場所は数多くありますが、その一つとして大学院という選択肢もあると思ったのです。（比較社会文化学府が、私のちっぽけな好奇心を満たすためのちっぽけな場所ではないことは百も承知です。また、この学府が第一に専門家や研究者を育てる場であることも忘れてはいけません。）このようなお粗末な考えを開陳したところで家族や友人を納得させられるかは不明ですが、それでも私は結局、自分の興味（ロシア、ロシア語、及び日本語）をはじめとして色んなことを広く知りたいという思いに駆られ、受験を決めました。そして今、比較社会文化学府に入学して本当に良かったと思っています。

3．ロシアと日本

日本語に関する授業はもちろん興味深く日々充実していますが、文献を読めば読むほど、読まないといけないものが出てきて収拾がつきません。今はひたすら大量のインプットをする時期だと自分に言い聞かせています。私は、ロシア語学習から日本語への興味が湧きました。ロシア語も日本語も細々と勉強中、といった具合です。

比文の学生はみな日本語が堪能で、日本語についてとかく私が述べる必要はないでしょう。ですから、ロシア語について少し話します。ロシア語、と聞いてもピンとこないかもしれません。ロシア語と日本語は言語の構造が大きく異なります。表面的な違いの説明のために良く言われるのは、言語類型論的な分類です。たとえば、ロシア語は語そのものの形態を変化させる屈折語タイプで、動詞や名詞の変化がたくさんあります。日本語は、語に助詞等の機能を付加させる膠着語タイプとされています。英語は、そのどちらもが折衷的に混ざって、また語順など重要ですから屈折語とも孤立語ともいわれていますが、とにかく三者はそれぞれ全く違うタイプの言語です。しかも、ロシア人って怖そうだし、国自体なんだか良く分からないし、クマとか歩いてそうだし…とにかくロシアってよく分からん！しかし（唯一かもしれない？）類似点、それは話者数です。第一言語の話者数を数えますと、ロシア語は旧ソ連圏内を中心に約１億５千万人に話されており世界８位、第二言語の話者人口を含めるとその数は約２億７千万人にものぼります。日本語はといえば、第一言語話者数約１億２千万人（つ

まり日本の人口)で９位。仲よく８位９位と並んでいます。国もお隣ですし（！）、お互い仲よく学び合ったらいいと思います。

ある世代以上の方はよく覚えていらっしゃると思いますが、米ソが雄を競っていた時代には、今では考えられないことに、ロシア語はとても人気のある外国語でした。左翼でなければインテリではない、という時代もありましたので、マルクス・レーニンをはじめとしてロシア文学も盛んに読まれ、とにかくロシア語はとても人気だったのです。しかしこれは、現在の状況と同じです。グローバル化で英語需要が高まっているから英語を勉強する。中国が経済的に伸びているから中国語。ソ連がそうだったように、アメリカ・中国の重要性が低下したら英語・中国語も流行らない言語になるかもしれません。なにはともあれ、流行っていることが勉強する理由になるのも悪いことではありませんが、流行ってなくても、流行っていないからこそ、（ロシア語とか日本語とか…）勉強してもいいんじゃないかなぁ、と思うのです。だから私は、日本語もロシア語も地味～に勉強を続けたいと思っています。

４．その他の授業

専門以外の授業では「知の加工学」という刺激の多い講義も受けています。この講座は、「知の加工」という観点からの日本研究を提示し、とかく陥りがちな専門研究から一歩離れ、自分の知らない世界に迷い込む時間です。授業では、「知の加工」というキーワードを通して先生方の研究の一端に触れます。つまり全く知らない分野の話を聞き、全く違う背景を持つ学生達が、全く準備なく、ぶっつけ本番であれやこれやと疑問を抱いて話し合う授業です。知らないことを聞くのは純粋にワクワクしますし、受講生からの鋭い質問に刺激も多いです。

５．終わりに

修士課程はあっという間です。ましてや日本語教師もしながらの二足のわらじですので日々忙しいですが、修士論文を書き上げるべく勉強を頑張るつもりです。具体的には、ロシア人日本語学習者、また日本人ロシア語学習者の悩みが少しでも解決できるような研究をしたいと思っています。残り一年、色々な人から刺激とやる気と元気をもらいながら、そしていつか誰かの役に立つために、比文で学んでいきます。

母の素朴な疑問「そもそもなんで福岡なの？」

私は応えて曰く「モスクワよりは近いでしょ！」

Спасибо, что выделили время для прочтения моей статьи.（すぱしーば　しと　ぅぃでぇりり　ぅれぇみゃ　どぅりゃ　ぷらちちぇにぁ　まぇぃ　すたちぃ）

写真　ロシア人日本語学習者とのお食事会。三色丼ぶりを作る。前列右から三人目が筆者

ゆっくりゆっくり、めぐりめぐって

相　原　幹　子
（日本社会文化専攻　修士課程）

みなさん、こんにちは。日本社会文化専攻の相原幹子と申します。2012年４月に九州大学大学院に入りました。

私が初めて福岡にきたのは、前世紀の終わりごろのことです。そのときにたまたま道を聞いた方が大変親切に教えてくださったため、大変よい印象を持っていました。

今回長期滞在することになりましたが、大きすぎず、小さすぎず、大変住みやすい街だと思っています。福岡にくる前には、インドネシアのジャカルタ、その間にはインドのムンバイという大都市に住んでおり、毎日の渋滞に参っていました。福岡では一部の時期をのぞいては、少なくとも通学中に渋滞で動けなかったということはありません。

今回社会人学生ということでこの原稿を書かせていただいていますが、日本語教育関係の場合、学部からそのまま進学してきた方より社会人の方が多いのではないでしょうか？受験のときにも、どうも社会人入試で、日本語教育関係らしいという方がいらっしゃって、ほっとしたのを覚えています。

私が学部を卒業したのは、20世紀のことで、その当時の卒業論文は手書きでした。ワープロでさえ普及していなかった時期です。それが九州大学に来てからは、パソコンが使えるのは当たり前というのが暗黙の了解で、若手の友人に教わりながら、体をがちがちにして日々を過ごしています。

大学院に行ってみたいというのは、学部のときからなんとなく思っていまして、卒業のときに一度受験をしたことがあります。そのときには、あまり深く考えずに受験し、見事に不合格となりました。その時は史学の専攻の学生でした。当時発行された、アラビアのロレンスについての漫画を愛読しており、のめりこんでいました。そして今興味を持っている日本語教育に関しては、まったく興味がありませんでした。

その後、日本語教育の勉強を始めたときも、むしろ日本語教育の歴史の方に興味を持っていました。大学院のゼミの発表のなかにも歴史関係のことがあり、大変興味深く聞かせていただいています。周りから見れば、私のたどってきた道は一貫性がなく、ふらふらしているように見えるだろうと思います。実際それはそうだと自分でも自覚しています。しかしそう思うと同時に、今までの経験があり、それなりに年月が経ってはじめて、今の自分があるようにも思われます。

現在の私が興味を持っていることは、日本語を母語としない介護に従事している人たちに対する日本語教育です。なぜそれに興味を持つようになったかといえば、大学院に入る前に、経済連携協定のもとで日本へ来ることになった看護師候補者、介護福祉士候補者の日本語教育に携わっていたからです。インドネシアのジャカルタで行われた看護師候補者、介護福祉士候補者の来日前の日本語教育の日本語講師として応募して、補欠合格となりました。繰り上がり合格が決まった次の日が大学院の入試前日で、面接で話せることができたとほっとしていました。

では、どうしてインドネシアに興味を持つようになったかと言えば、いろいろあるのですが、そのひとつとして、その前に滞在していたインドで、毎朝モスクから聞こえてくるアザーンの声で目を覚まし、ムスリムの仕立て屋さんに服を仕立ててもらっていたということが挙げられます。そこから世界最大のイスラム教徒が存在するインドネシアに興味をもったともいえます。

では、なぜインドに興味を持つようになったかといえば、その前に働いていた日本語学校でインドからの学生や、インドに関係のある学生に接していたからです。

そんな風にずっとたどっていくと、今に関係することがいろいろと思い浮かびます。今は日本語学校や大学ではないところで日本語を勉強する学習者の方に興味があるのですが、私が日本語教育にかかわるようになったのは、地域の日本語ボランティアが最初でした。

これからもこんな風に少しずつ少しずつかかわりをつなぎながら、周りの人に助けられながら生きていくのだろうと思います。日本国内でも、国外でもいろいろな人に助けていただきました。助けていただいた本人に直接お返しはできませんが、大学院で研究しようとしていることを含めて、私が何らかの形で他の方のお役に立てればと思います。

博士論文を書き終えて

本　多　美　保
（梨花女子大学　人文科学部）

日本語教育に携わってかれこれ19年になろうとしています。九州大学大学院修士課程に入学したのは、日本語教師になって10年目の2003年４月でした。私は福岡の日本語学校で日本語教師をしていましたが、教師として経験を重ねるうちに自分の日本語に関する知識の少なさ、日本語教授に関する未熟さを感じるようになっていました。もう少し頼もしい先輩教師になりたいという気持ちから九州大学大学院の受験を決意しました。

私は日本語教師として奉職する中で、常に肝に銘じていることがあります。それは「学習者のニーズに従って日本語を教える」ということです。特に日本語学校では、経済的に苦しい生活のなかで、高い学費を払って学校に通う学生が多かったため、彼らのニーズを汲み取り、将来役に立つ日本語教育を行いたいと思っていました。日本語学校では中国人学習者が多かったことから、修士課程では中国人学習者が求める日本語教師とはどのような教師かについて研究を行いました。そして、博士論文では研究対象を韓国、韓国人学習者にかえて、「韓国の四年制大学における母語話者日本語教師の役割と能力」というテーマで、研究に取り組みました。韓国の大学のニーズに答えられる母語話者教師の資質を明らかにし、不足している能力を補うための教師教育案を開発することで、韓国の日本語教育の発展に貢献したいと思ったからです。博士論文の準備にとりかかったのは６年前です。今回、この６年間を省みる機会をいただきましたので、研究を進めていく中で、私なりに克服していったことについて振り返ることで、後輩の方々の参考になればと思います。

博士論文を書くにあたって、まず行ったことは、自分がやりたい研究が日本や外国でどこまで進んでいるのか、これまでの研究で欠けている観点は何か、研究を行う価値があるのかを先行研究文献から見つける作業でした。先行研究を何度も読み込み、重要と思われる部分をパソコンに打ち込んでいく作業を続けました。日本語教師の仕事をしながらの作業でしたので、思うほど捗らず長い時間を要しました。その後、研究目標とそれに対する仮説を立て、研究をどのように進めていくかについて、大まかなスケジュールを組みました。

研究を進めるために克服しなければならないことの一つは、韓国語能力を高めることでした。先行研究の分析、調査紙の作成、回答の分析など、論文を書くにあたって高度な韓国語能力は必須でした。そのため先行研究の分析をしながら同時に韓国語力を高めるための努力をしました。韓国のドラマやニュースを見たり、韓国語の専門書をどんどん読みました。そのおかげで、研究に支障のない程度まで能力を高めることができたと思います。論文執筆を意識した学習方法のせいで、聴解力と読解力が先に発達した感はありますが、短時間で必要な能力を向上させるための学習法としては効果的ではなかったかと思います。試験も積極的に受けて、自分の実力を確認し、刺激を与えました。

研究での最も大きな難関は調査を行うことでした。韓国の大学が求める教師の資質を明らかにするためには、韓国人の日本語学習者はもちろん、韓国人の先生、日本語母語話者の先生に調査への協力をお願いしなければなりませんでした。質問紙調査をなさった方ならご経験があるかと思いますが、調査への協力は簡単に得られるものではありません。私の調査においても一人でも多くの方に協力していただくために、日本語関連の学会にあちこち出かけては、一人一人に直接お願いしました。中には、自ら協力を申し出て、何人かの先生に声をかけてくださる方もいらっしゃいました。そんな方に出会った時どんなに有難かったかわかりません。

論文を書き進める際に留意したことは、書く勢いを継続させることでした。常に仕事をしながらの作業でしたので論文を書く時間を毎日十分に確保することは易しいことではありませんでした。しかし前日までに書いたものを必ず読み返し、訂正しながら１行でも２行でも前に進むようにしました。全く論文を見ない日を作ってしまうと、書く勢いが無くなってしまうため、毎日の作業として自分に課しました。長期休暇の際には、長期目標と一日の目標を決め、ノルマを達成するようにしました。特に予備審査が終

わってから、先生方にいただいた課題を解決し、目標の日程に完成させるためには徹底的なスケジュール管理が必要でした。一日も遅れないように気力を保つことは大変でしたが、目標を達成したときの爽快感を楽しみに毎日こつこつ書き進めました。

論文を執筆しながら感じたことは、自身の未熟さです。書く技術、分析力、考察力などはもちろん、日本語教師としての能力の未熟さを知るよい機会になりました。母語話者教師に自身の能力を振り返り未熟な能力に対して自己研磨を促すことを最終目標として始めた研究でしたが、私自身が論文を書く過程で、教師としての能力を内省し自己研磨を経験することになりました。そういう意味でも、この論文執筆は教師としての私を成長させてくれたと言っても過言ではありません。

博士論文を書き終わって思うことは一つだけです。 それは、「途中で諦めなくてよかった。」です。

論文を執筆した６年の間に、「もう無理だ」「これ以上できない」など、ネガティブな考えが頭の中を数十回、数百回と浮かんでは消えました。それでも放棄しなかったのは、一度始めた研究を途中で止めることへの悔しさと指導教授の励ましがあったからです。論文を修正してメールで送り、それが真っ赤になって送り返されてくるたびに、自信を失ったものですが、メールの最後に必ず一言、「あと少し」とか「頑張って」と書き添えてありました。その言葉を見る度に、「そうだ、あと少しだ」「頑張ろう」と励まされました。実は、論文の進行具合は「あと少し」ではなかったと思いますが、教授のこの一言は私を奮起させ、ゆっくりとではありますが、前へ進む勇気を与えてくれました。

現在、博士論文執筆中で、挫折しそうになっている方がいらっしゃるなら、私がお伝えしたい言葉は「途中で諦めないでください。」の一言に限ります。自身の研究を完成することで得られる喜びと充実感は、完成した者しか味わうことができません。皆さんにもその喜びをぜひ知ってほしいと心から思います。

論文が完成して、私はまた新しいスタート地点に立ちました。現在、韓国の大学に勤務し、研究をさらに発展させる準備をしています。韓国という国に融和しながら、日本語教育の発展に貢献するために何をすべきかを考えていくことが私の使命であると思います。そしてその延長線上に日本と韓国の成熟した関係を成立させる媒介者としての役目があれば幸せなことだと思っています。

最後に、未熟な私を最後まで辛抱強くご指導くださった松村瑞子先生、因京子先生、井上奈良彦先生、西山猛先生、門倉正美先生に心からお礼を申し上げます。

梨花女子大学

○○○ 新しい出発

蒼雲を笠にかぶりて

土　井　徹　平
（九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門助教）

2012年の12月、私は「九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門」という、名刺を作る際、１行ではなかなか収まらない名前の文書館の助教に就任しました（以下「記録資料館」）。九州で古くから歴史研究を行ってきた方には、「石炭研究資料センター」という名称の方がしっくりくるかもしれません。私にとってもそうです。

「記録資料館」はかつての「石炭研究資料センター」（以下「石炭研」）で、2005年、「石炭研」の資料・図書を引き継ぐ形で新たに発足しました。ここには主に全国の旧産炭地で蒐集された石炭産業に関連する史料が保管・公開されています。比較社会文化学府（以下、「比文」）に所属していた当時、私は「石炭研」の所長、東定宣昌教授のゼミに参加しており、そこで日本の炭鉱・鉱山史を学ぶとともに、史料の蒐集や分析の仕方、研究者としての心構えなどを学びました。したがってこの度、「石炭研」の後身である「記録資料館」の助教に就任できたことは、巡り巡って故郷（ふるさと）に戻ってきたような感覚を抱きます。

私が大学時代から強い関心を抱いていたのは、近代の鉱山で働いた坑夫たちでした（鉱山と炭鉱は似て非なるものなのですが、その説明は割愛します）。明治・大正時代、近代鉱業の発展に伴い労働需要が急増していくと、坑夫は自らの職人的な「腕」をより高く評価してくれる現場を求め、全国の鉱山を単身で遍歴しながら生活するようになります。彼らの勤続年数はおおむね３年（短い場合は１ヶ月）といったところで、まだ電車もほとんどなかった当時にあって、なんと九州から北海道に至る範囲を移動しながら働いています。

こうした近代の坑夫の生活・労働実態を実証的に研究したいと考えていた私にとって、炭鉱・鉱山に関連する史料や図書が山のようにある「石炭研」は理想的な研究環境でした。しかも、ここには同じ分野を研究する数多くの仲間がおり、専門用語などを気兼ねなく用いながら闊達な議論が出来ました。

ですから、あの頃の私は前途洋々で、「石炭研」で仲間たちと自主ゼミを始めることとなった際、その案内状の中でこんな文章を書いています。

「近代の鉱山の坑夫は、“唯一の頼みとするは自己の腕のみにして蒼雲〔青空〕を笠にかぶりて世の中を渡る一本立の者”でした。こうした坑夫の、手に職をつけた職人的あり様は、我々が目指す学者とも重なるところがあります。我々はこれから学者として一本立ちしなければならず、本研究会がそのうえで必要となる「腕」を自覚的かつ実践的に磨いていける場となることを希望します。」

これは、先日、『CROSSOVER』の原稿を書くにあたり、古い記録を整理していたところ見つけたものです。今、あらためて読み直すと、臆面もない決意の告白が、いかにも若輩による文章といった感じですが、まさにかつての私を象徴する文章だと思います。当時の私は「一本立ち出来るか」ではなく、「一本立ちするんだ」と考えていましたし、そのことに不安も抱いておりませんでした。

入り口に立つ大きなイチョウの木が印象的な記録資料館

そしてこの際の言葉通り、比文を巣立った後、私は「蒼雲を笠にかぶりて世の中を渡る一本立の者」として生きることとなります。ただそれは、私が想定していた未来とは、だいぶ様子が違っていました。私を待っていたのは、大学に招聘されて、あるいは新たな史料や知見を求め、他の地に赴く学者としての生活ではなく、宿る場所もなく大学から大学へと渡り歩く非常勤講師としての生活でした。

博士号取得の年、すぐ非常勤講師の職に恵まれた私は、その後、４ヵ所の大学で計９コマの講義を担当することになります。365日、授業準備に追われるような日々でしたが、その傍ら何とか時間を作っては公募の出た大学に履歴書と論文を送り続けました。しかし、期待を抱き待っていた先方からの返事は、常に「貴意に沿えない結果となりました」という一文のみでした。

私は近代の坑夫とは逆に、自らの「腕」を買ってくれる場所を見出せず、実に４年もの月日を「無所属」のまま、非常勤先を渡り歩いて、生計を立てる暮らしを送ることとなります。

このように書くと、まるで大学院を出たとたん、それ以前とは一転し暗夜行路を行くことになったかのように聞こえるかもしれませんが、必ずしもそういうわけではありません。確かに不安やストレスは掃いて捨てるほどありましたが、その生活も決して暗くつらいばかりのものではありませんでした。

近代の坑夫は、単に待遇の良い山を求め遍歴したのではなく、見たことのない山や、行ったことのない街を見たさに遍歴したとあります。一日の半分を暗い地下で生活していた坑夫たちにとって、「陸（おか）」（坑外）に出て、気の向くままに各地を渡り歩くことは、外界の刺激を求めての旅でもあったのです。

そしてもう１つ、坑夫にとって遍歴には重要な意義がありました。幾多の現場を経験することで、それまでに身に付けられなかった新たな技能を身に付けるということです。

博士論文執筆のため、終日、自室にこもって、ほとんど外に出ないような生活を続けてきた私にとって、講師生活はまさに刺激に満ちた外界への旅であり、それは同時に、大学院時代には培えなかった新たな技能を習得するための修業の旅となりました。

それまで授業などしたことがなかっただけあって、赴いた先での当初の講義は、本当に惨憺たるものでした。学生たちは、いい意味でも悪い意味でも実に素直で、私の力量が彼らの授業態度にそのまま反映します。話の展開がまずければ、学生のモチベーションは目に見えて下がりますし、板書や雑談を入れるタイミングによっても居眠りや私語が増減します。授業が終わるたび、「いったい何がいけなかったのか…」と、反省と後悔の念を抱きながら帰途についていたことを、昨日のことのように覚えています。そのうえ、大学や学年によって、例え同じ内容の授業でも学生の反応がまったく違ってくるのですから、すべての授業でうまく講義をやろうと思えば、その時々で状況を判断し、臨機応変にやり方を変えることの出来る特殊な技能が不可欠です。そしてその習得に必要なものと言えば、経験以外ありません。

幸い私は４年間、それぞれ学風の大きく異なった大学を渡り歩き、数多くの授業を担当させてもらえました。この結果、経験から技術へ、そして技術が感覚的な技能に昇華していくプロセスを身をもって体験出来たことで、私は大きな自信を得ることが出来ました。今では学生の反応を期待しつつ教壇に立ち、その反応に教育の面白みを実感しています。

そして何より、私はこの間、決して一人ではありませんでした。そのことで得られたものは、苦しい時期だっただけに大きかったと思います。

自らを「蒼雲を笠にかぶりて世の中を渡る一本立の者」と形容した坑夫たちですが、彼らが思いのままに各地を遍歴しながら暮らしてこられたのは、単に坑夫が皆、手に職をつけていたからではありません。彼らには協力者がおりました。同じ坑夫たちです。

坑夫は「友子（ともこ）」という名の同職集団を組織していました。この「友子」に加入していれば、鉱山から鉱山へ渡り歩く際、それぞれの山で働く坑夫から、同じ「友子」の坑夫であるという理由で、旅費の一部をカンパしてもらえました。また、ある山で働きたいと思えば、その山で働く坑夫が就職の斡旋をしてくれました。怪我や病気で働けなくなった際には、やはり坑夫がお金や人を出しその者の扶助を行っています。そうした同職者による手厚い保護があったからこそ、坑夫たちは着の身着のままで遍歴生活を送ることが出来たんです。

これは私も同じでした。常勤の職が決まるまでの間は、どうしても大きな不安を抱えて過ごすことになります。例え教育力を着実に高めていこうと、その努力が報われるという確証などなく、もしかしたら来年も今と何も変わらない生活を送っているかもしれない。それどころか自分はこ

○○○ 新しい出発

のままずっと非常勤講師なのかもしれない。そんな不安がいつも付きまといます。しかも非常勤は決して儲かる仕事とは言えません。経済状態はぎりぎりですから、常に追い詰められた状態での生活を余儀なくされていたのが実態です。

ただ私には、ろくな物を食べてないだろうと食事に誘っては、叱咤してくれる先生がいました。生活が苦しい時は、アルバイト先を紹介してくれた友人がいました。また誘えばいつだって飲みに付き合ってくれる「石炭研」時代からの仲間がいました。彼ら「雨天の友」が、どれほど私の心を軽くしてくれたかわかりません。

明治時代に数十か所の鉱山を渡り歩いた経歴を持つ永岡鶴蔵という人物は、鉱山を転々とする中で、「旅は飢ひもの辛もの」ということを知り、他人の善意にふれることで、自らも「友子」の一員となっています。そしてこの後、彼は労働組合を組織し、同じ坑夫のために生涯を捧げます（中富兵衛『永岡鶴蔵伝』、1977年、御茶の水書房より）。比文にいた時代、私は「自力」を過信し、己の力のみで一本立ち出来るものと考えていました。しかし「旅は飢ひもの辛もの」。私もここで多くのことを学びました。

「故郷（ふるさと）」に戻り、ひとまず地に根を張ることの出来たこれからは、記録資料館のレファレンス担当員として、私が学者や学者を目指す人たちの助けになる番です。まだ着任したばかりなだけに、わからないことだらけですが、私にとって原点となったこの場所で、また一から経験を積み、より多くの場面で利用者の助けとなれるよう、最善を尽くしていきたいと思っています。

平成24年度修士論文題目一覧
日本社会文化専攻

修　士　論　文　題　目
換金作物栽培の導入による土地利用変化と世帯の生計戦略 ータイ東北部の山地村落を事例としてー
海外における実用性がない日本語学習の意味 ーグアテマラの事例を通してー
軍港佐世保の都市形成 ー鎮守府設置から市制施行までー
The Correlation between Group Activities and Identity Formation of Long-Term Foreign Residents in Japan.
日本と中国の原子力発電の安全性問題
証拠性表現の日中対照研究 ー「ヨウダ」、「ラシイ」と「(シ) ソウダ」を中心にー
Implicit and explicit English knowledge and learning triggered by Form-focused instruction
実習カリキュラムデザインのための基礎的研究 ー日本語教師養成に求められる実践的能力とはー
横光利一における「新感覚」 ー「感覚」と「官能」の差異を手がかりとしてー
MEMORIES OF THE SECOND WORLD WAR THROUGH JAPANESE MANGA.
童謡詩人金子みすゞの誕生 ー雑誌「童話」を中心に
自動車部品産業の生産システムと展開 ー自動車タイヤ産業の生産システムを中心にしてー
日系多国籍企業の中国における市場戦略の変化と人材現地化に関する研究 ーパナソニックの中国における電子部品の販売会社を事例にー
井上靖の「楊貴妃伝」と依拠した史書の比較研究
林芙美子の戦後作品における「漂泊する」女性像ー「晩菊」と「浮雲」を中心に
テキストにおける中日指示詞文脈指示の対照研究 ー「指示詞＋時間名詞」の対照を中心にー

○○○ 大学院データブック

中国のアニメを中心としたネット配信ビジネスの現状と今後の展望
大分市萩原における歴史と文化の検証 ー近世から近代を中心にー
「満州国」における吉林省通化の「朝鮮人」に対する教育政策 ー学校教育を中心にー
古墳時代前期における倭製鏡生産体制の研究
中国における天然ガスの市場競争力についての分析ー民生用ガスを中心に
新美南吉「ごん狐」論
A Comparative Study of Changes in Japanese Society and Changes in Gakuen Drama
日本語母語話者の会話におけるあいづちの表現形態に関する一考察 ー親疎関係、男女差とのかかわりー
日本人移住者とマレーシア人、時間感覚のズレの考察 ー３つの場面におけるインタビュー調査分析ー
長崎市の義務教育段階の平和教育における「平和」概念の変遷
Systematic study of the genus *Atherigona* Rondani of Japan（Diptera: Muscidae）
近代における日本百貨店の中国東北部進出 ー三越大連支店を中心にー
中国の原子力発電産業の現状と課題ー政策の転換と国産化の進展を巡って
中国地方都市における大学発ベンチャー企業の発展 ー遼寧省の東軟集団を事例として
中国原子力発電事業についての社会史的研究
福永武彦の『慰霊歌』と『草の花』の比較研究
福沢諭吉の対清、朝鮮認識
将来世代の義務の正当化 ーアヴネール・デ・シャリットの「超世代的共同体」を手がかりにー

国際社会文化専攻

修　士　論　文　題　目
Revaluation of Genetic Diversity and Population Structure of Finless Porpoise (*Neophocaena phocaenoides sunameri*) in Japanese Waters: Implications for Management and Conservation
董行政長官在任中の「普通選挙」問題及び曾行政長官在任中の「任期」問題－基本法の解釈を中心として－
地域社会の政策やイメージの変遷と観光広告の関連性について －北九州市を事例に－
Narcotraffic in Mexico：An Inquiry to the Political Changes from PRI to PAN
天然および合成金雲母 －木下石系固溶体のＸ線リートベルト解析と中・遠赤外吸収スペクトル
1960年代韓国における言語政策「ハングル専用」か「漢字復活」 －閔寛植文教部長官の漢字推進とその実績を中心に－
宮崎駿作品に関する考察 －『千と千尋の神隠し』における建築の果たす役割をめぐって－
中国の対外援助の歴史的変遷 －対アフリカ援助を事例にして－
日本政治における政党支部と政治家の関係 －山崎拓を事例として－
オオクワガタ（*Dorcus hopei binodulosus*）日本集団における人為的撹乱の検証
中国朝鮮族の会話におけるコードスイッチングの実態研究
残留孤児二世の来日状況調査 －来日動機と日本への定着問題－
秦観『進論』に関する研究
加藤周一の雑種文化論 －戦後日本の精神的再建をめぐって
Henry V as the Ideal King
浄水汚泥の園芸植物栽培への利用に関する研究
中国都市部における社区の実態 －河南省の永城市を例に

○○○ 大学院データブック

中国の対スーダン石油外交 －1995年の初進出はどう決定されたのか－
高等学校のオーラル・コミュニケーションⅠにおけるスピーキング活動 －プレゼンテーション活動による生徒たちの動機づけに着目して－
シュヴァルツヴェルダー・キルシュトルテから見えるドイツ菓子トルテの文化史的考察
北大西洋堆積物に基づく大陸氷床拡大期の気候変動のミレニアム解析
REPRESENTATIONS OF BRAZIL AND BRAZILIANS IN JAPANESE ANIMATIONS
Margaret Thatcherの演説分析 －代名詞 “We” の使用について－
『酔翁談録』の性質と受容に対する再検討

平成23年度博士学位（課程博士）取得者および論文題目一覧

学位番号	学位の種類	（フリガナ） 氏　　名	専攻名	博　士　論　文　名	授与年月日
比文博甲 第171号	比較社会 文　化	佐藤（サトウ）秀信（ヒデノブ）	国際社会 文　化	アメリカの戦後国際秩序構想と初期戦争裁判の展開 －山下奉文裁判を手がかりに－	平成23年 4月30日
比文博甲 第172号	比較社会 文　化	鄭（チョン）美京（ミギョン）	国際社会 文　化	日本における韓国古典小説受容の動態的研究 －江戸時代から1930年代までを中心として－	平成23年 5月31日
比文博甲 第173号	比較社会 文　化	崔（サイ）亜珍（アチン）	日本社会 文　化	日本語学習者によるテンス・アスペクトの習得研究－ SRE理論の観点から	平成24年 1月31日
比文博甲 第174号	比較社会 文　化	徐（ソ）忍宇（イヌ）	日本社会 文　化	村上春樹文学における〈コミットメント〉の研究 －「分裂」から「統合」への変容 －	平成24年 2月29日
比文博甲 第175号	比較社会 文　化	熊（ユウ）涛（トウ）	国際社会 文　化	The cultural politics in Chinese EFL textbooks : A discourse approach （中国英語教科書における文化政治：ディスコースアプローチ）	平成24年 3月27日
比文博甲 第176号	比較社会 文　化	貴田（キダ）潔（キヨシ）	日本社会 文　化	日本中世における荘園制の構造と地域社会	平成24年 3月27日
比文博甲 第177号	比較社会 文　化	神谷（カミヤ）美和（ミワ）	日本社会 文　化	史料としての稲品種、農耕絵馬 － 福岡県における近代より前の稲作景観復原のために－	平成24年 3月27日
比文博甲 第178号	比較社会 文　化	徐（ジョ）燕（エン）	日本社会 文　化	映像作品を利用した語用論的技能養成の方法開発 －中国人中・上級日本語学習者を対象として－	平成24年 3月27日

比文博甲 第179号	比較社会文化	陳（チン） 一（イー） 吟（イン）	日本社会文化	日本語におけるジェンダー表現 ー大学生の使用実態および意識を中心にー	平成24年 3月27日
比文博甲 第180号	理学	奥（オク） 村（ムラ） 知（トモ） 世（ヨ）	国際社会文化	Geomicrobiological processes forming daily laminated travertines 日輪トラバーチンを形成する微生物地球科学的プロセス	平成24年 3月27日
比文博甲 第181号	理学	Md. Shamim Uddin（モハマド シャミム ウディン）	国際社会文化	Mechanism of Arsenic Release from Peat Sediments into the Groundwater of Wells in the Rural Villages of the Bengal Delta （ベンガルデルタの農村における泥炭質堆積物から地下水（井戸水）へのヒ素溶出のメカニズム）	平成24年 3月27日
比文博甲 第182号	比較社会文化	管（スガ） 原（ハラ） とよ子（トヨコ）	日本社会文化	遠藤周作論 ー『アデンまで』から『イエスの生涯』までにおける「同伴者イエス」追究の過程ー	平成24年 3月27日
比文博甲 第183号	比較社会文化	王（オウ） 娟（ケン）	日本社会文化	日本語の接尾辞「的」に関する歴史的研究 ー認知言語学の視点からー	平成24年 3月27日
比文博甲 第184号	比較社会文化	王（オウ） 鵬（ホウ）	日本社会文化	中国人民解放軍の生産経営活動に関する研究	平成24年 3月27日
比文博甲 第185号	比較社会文化	余（ヨ） 信（シ） 鎬（ノ）	日本社会文化	歴史認識上のナショナリズム ー韓国近代史学100年史に与えた皇国史観の影響ー	平成24年 3月27日
比文博甲 第186号	比較社会文化	石（イシ） 川（カワ） 朋（トモ） 子（コ）	日本社会文化	くだけた会話の教育方法開発のための基礎研究 ー若年層の韓国人日本語学習者を対象としてー	平成24年 3月27日
比文博甲 第187号	比較社会文化	趙（チョウ） 海（カイ） 城（ジョウ）	日本社会文化	日本語連体修飾構造における述語動詞の形式について ーいわゆる「テイル」の交替形としての「タ」形を中心にー	平成24年 3月31日
比文博甲 第188号	比較社会文化	横（ヨコ） 山（ヤマ） 尊（タカシ）	日本社会文化	優生学運動と日本社会 ー科学啓蒙と雑誌メディア、そして生殖の政治ー	平成24年 3月31日

平成23年度博士学位（論文博士）取得者及び論文題目一覧

学位番号	学位の種類	（フリガナ） 氏名	博士論文名	授与年月日
比文博乙 第26号	比較社会文化	徳（トク） 永（ナガ） 達（タツ） 哉（ヤ）	「国家Symbol」によるSymbolic Speech	平成23年 4月30日
比文博乙 第27号	比較社会文化	小（コ） 林（バヤシ） 正（マサ） 信（ノブ）	織田・徳川同盟と王権 ー明智光秀の乱をめぐってー	平成23年 8月31日
比文博乙 第28号	比較社会文化	石（イシ） 川（カワ） 健（タケシ）	列島先史社会復元のための基礎的研究 ー考古学的社会復元における民族誌運用の方法論的研究ー	平成23年 10月31日

○○○ 大学院データブック

比文博乙 第29号	比較社会 文　　化	日下（クサカ）　渉（ワタル）	フィリピン民主主義と道徳政治	平成24年 3月27日
比文博乙 第30号	比較社会 文　　化	大杉（オオスギ）　卓三（タクゾウ）	情報通信技術による地域開発 ー大分県における地域情報化過程の実証的研究ー	平成24年 3月27日
比文博乙 第31号	比較社会 文　　化	端野（ハシノ）　晋平（シンペイ）	水稲農耕開始前後における日本列島･朝鮮半島間交流の研究	平成24年 3月31日

九州大学

比文・言文研究教育棟

伊都キャンパスセンターゾーン

広報情報化推進委員会よりおしらせ

『クロスオーバー』に寄稿された原稿の著作権は著者が有するものとする。ただし比較社会文化学府（広報・情報化推進委員会）は広報活動の一環としてそれら著作物をウェブサイト等で公開する権利を保有する。

（2010.10.08 第 2 回広報・情報化推進委員会決定、10.22 学府教授会報告）

編集後記

本号で33号となる『クロスオーバー』には、今回も、比文メンバーの「越境ぶり」を遺憾なくしめす原稿を多数お寄せいただきました。寄稿いただいたみなさまに厚くお礼申し上げます。また、巻頭には、いろいろな意味で、比文の「スピリット」を体現する『震災プロジェクト』に関する最新の報告を、学府長自らお寄せいただきました。改組も進行中ですが、このスピリットを忘れず前進してゆきたいものです。（溝口孝司）

SCSのロゴの説明

ＳＣＳ（エス・シー・エス）は、九州大学大学院比較社会文化学府の英文名称 Graduate School of Social and Cultural Studies の略称です。ロゴはＳＣＳを図案化したものです。考案者は「二羽の鴨に見える」と主張していますが、「一羽にしか見えない」と言う人もいます。しかし家鴨ではないという点では、私たちの意見は一致しています。裏庭の囲いのなかで餌をもらって外の世界を知らずにいる家鴨ではなく、越境する渡り鳥である鴨こそが、私たちのめざす新しい学府にふさわしいと考えているからです。

広報情報化委員会　クロスオーバー編集担当：溝口孝司・阿部康久

GRADUATE SCHOOL OF
SOCIAL AND CULTURAL STUDIES

発 行 者　九州大学大学院比較社会文化学府
発行年月　2013年　3月

〒819-0395　福岡市西区元岡744
TEL：092(802)5786・5787
FAX：092(802)5785
ホームページ：http://scs.kyushu-u.ac.jp/